
皇帝と赤い服の男

谷津矢車

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

皇帝と赤い服の男

【Nコード】

N5888C

【作者名】

谷津矢車

【あらすじ】

絶海の孤島セント＝ヘレナ島で、まさにその数奇な人生を終えんとしている「コルシカの悪魔」ナポレオンは、数度にわたり己の前に現れた、「赤い服の男」のことを思い出す。ナポレオンの人生とは一体なんだったのかに迫る。・・・一応、歴史物ですが、ちよっとファンタジー要素も入っております。

ふふ、人生とは、判らぬものだ。一時は皇帝にまで登りつめた我輩が、今はこんな小さな島で幽閉生活とは。

後の世で、「フランス革命の最後の当たり籤くじを引いた男」と評された男、ナポレオンⅡボナパルトは、安楽椅子に座りながら、誰にも聞こえないようにため息を吐いた。

窓の外には、ヨーロッパとは明らかに異質な植物相の森と、地中海沿岸を思わせるぶどう畑が隣り合っていた。それを燦々と輝く太陽光が照らし、心なしに景色全体を白っぽく染めている。さらに遠方には、水平線がどこまでも続いた海が広がっている。

だが、この景色は、ナポレオンにはどうも好きになれなかった。一度は外の景色に目を遣ったナポレオンだったが、また視線をがらんとした部屋に戻した。そして、安楽椅子を少し漕いだ。

ここは南大西洋の、セントヘレナ島。

「世界で二番目に陸地から遠い」とギネス登録されたこの島は、その立地上、流刑地として用いられている。この話の主人公ナポレオンも、その例に洩れず、この地に流刑者として滞在している。

赤道直下であるため、太陽光が強い。かつてナポレオンはエジプトで刺す様な太陽光に目を細めたことがあったが、それ以上のものであった。その太陽光に、眼のみならず、心も焼かれてしまったようだった。

ナポレオンⅡボナパルトを一言で評するなら、「不屈の男」であった。

度々投獄の憂き目に遭ったし、それこそ命の危機さえ何度もあった。流刑された事さえある。

だが、その度に「不屈の男」は立ち上がった。投獄の屈辱に耐え、風向きが変わるのを待ち、追い風になったところで己の逆境を跳ね

返した。そして、終には皇帝にまで登りつめた。

しかし、セントヘレナ島に配流された頃の　　つまりは晩年の

ナポレオンには、そんな力は残っていなかった。

もはや、自分の逆境に抗うだけの若さは、我輩にはない。

ナポレオンは、ギリギリ痛む腹をさすり、ため息を吐いた。

ナポレオンには持病があった。それは、胃痛。

軍の指揮官として卓越した才能を見せたナポレオンだったが、やはり彼も人の子だった。数千、数万の同胞の兵士の命を預かるという責任。必ず勝たねばならない、という本国からのプレッシャー。そして「天才軍略家」としての、ナポレオン自身のプライド。その全てが、彼の胃をスタスタに破壊した。

彼の前半生における華々しい成功の影には、その成功の分だけ苦しむ彼の姿があったのだ。

もはや老境の気分にし掛かったナポレオンは、思わずため息を吐いた。そんなとき、ナポレオンの後ろから声が響いた。

「おや、ボナパルト將軍。ご気分でも優れませんか？」

思わず、ナポレオンはギクツとした。ああ、ため息がよりにもよってこの男に訊かれてしまったか。ナポレオンは心の中でため息を吐いた。

嫌味つたらしい口調でナポレオンにそう言ったのは、セントヘレナ島の総督、ハドソン＝ロウだった。

ひよろつとした体格。身なりは総督らしく着飾ってはいるが、まるで気品という物がない。そんな彼は、まるでナポレオンを見下すかのように、前に立った。そんな彼の姿にナポレオンは不快になりながらも、努めて冷静な口調で答えた。

「あ、ああ……。胃が痛いものでな……。侍医を呼んでくれんか」

すると、ハドソンは悪魔のような醜悪な笑みを一瞬浮かべ、それを表情から追いやった後、冷静に答えた。

「侍医は、帰国しました」

「な、なんだと？どういうことだ」ナポレオンは思わず安楽椅子から立ち上がらんとした。しかし、それをハドソンは手で制止してから言った。

「いえ、正確には、私が帰国させました。あの侍医は、どうにもヤブ医者なようで……。今度は我々が、もつと良い医者をお連れしますよ、將軍」

ナポレオンは、「將軍」と自分を呼ぶハドソンに怒りを覚えた。仮にも皇帝にまで登りつめた我輩に、かような言葉使いをするとは……。怒りの度にナポレオンの胃はキリキリと痛む。だが、それは我慢するしかない。流刑地において流刑者の前歴など関係ない。いくら元皇帝であろうとも、流刑者は流刑者なのだ。そこを理解しているナポレオンは、あえてこの屈辱に耐えながら訊いた。

「と、いうことは、今、この島には医者は居らぬのか？」
すると、ハドソンの口元が歪み始めた。その口から、漏れ出るように言葉が出た。

「そうですね、我々の世話になっている医者が一名、あとは農民たちを診ている村医者が一人、ですかねえ。ただ、將軍は我々の医者をお気に召さぬようですから……。村医者をお呼びしましょうか？」

ナポレオンは、ハドソンが紹介する医者が気に食わない。奴が紹介する医者の方方する薬を飲むと、まるで滝のような吐血で夜も眠れない羽目になる。おそらく、ハドソンの差し金だ。奴が、我輩を殺そうとしているにちがいない。

そう考えたナポレオンは、ハドソンの紹介してくる医者は遠ざけている。

だが……。だからと言って……。

「ならば、誰も呼ばないで良い！」

ナポレオンはそう怒気をはらんだ口調で答えた。

すると、ハドソンは満足そうな笑みを浮かべた。まるで、トンボの手足を一本ずつもいでいく子供のような、笑顔。

緩んだ口元から、ハドソンは声を出した。

「左様で？はは。まあ、死期が近い人間に、医者は不要、ですか」
「何だと？」

「あ、いえ、こちらの話ですよ。」
「……ときに、お体の調子、お悪いのでしょうか？」

ハドソンの言うとおりだった。

ナポレオンの体調は、ここのところ大変悪い。妙に貧血気味で、食欲もない。

だれしも生きている人間は「死」を経験したことは無いが、ナポレオン自身や周囲の者をして、「お呼びが近い」と思わせるに充分な体調であった。

「まあ」そう前置きしてから、ハドソンは窓の外を眺めた。「あとわずかしかない人生です。せいぜい、その最後をお楽しみください」

「……こんな、何も無い島で、しかも、自由な外出も許されない、こんな状況で、か？」

そうナポレオンが訊くと、ハドソンは笑った。そして、皮肉っぽく言った。

「それはあなたのせいでしょう、將軍？」

明らかな蔑みの目をナポレオンの目に向け、ハドソンは続けた。

「ヨーロッパ中を戦火に巻き込み、結果何万人も殺した『咎人』とがひとに、自由などあるわけないでしょう？」

ハドソンは棚を指差した。棚には、フランス製のワインが無造作に置かれている。そして、やけに恭しく言った。

「あちらのワイン、ご自由にどうぞ」

そう言い残すと、ハドソンはナポレオンを残し、部屋を後にした。ワイン、か……。

ナポレオンは痛む腹をさすりながらも、立ち上がりワインのボトルを手を取った。

そしてまじまじと眺めるに、封を切られた形跡はない。毒の混入

を疑うことも無かるう。

そう考えたナポレオンは、自分でワインの封を開け、グラスにその中身をトクトクと注いだ。

おお、赤か。グラスには、赤い液体がなみなみと湛えられていた。だが、その二オイは全くかぐわしいものではなかった。まるで、酢のような二オイが、ナポレオンの鼻をついた。

みると、どのワインもかなり古い。しかも、保存状況もよくないものが多いらしく、中にはラベルの上にカビが生えたものさえあった。

ハドソンめ。いやがらせ、か。

ナポレオンは、この棚を指差したときの、ハドソンのいやらしい笑顔を思い出した。

「奴め、我輩を何だと……」

思ってるのだ、という言葉が喉から出そうで出なかった。

そうだ、我輩は流刑者なのだ。もはや、皇帝でもなんでもない。ただの、咎人なのだ。

ナポレオンは、崩れるように安楽椅子に身を預けた。

そして、思った。『ああ、こんなときに、あの“赤い服の男”が居れば……』

ナポレオンの、人生の節々にその姿を見せた“赤い服の男”。あの男が今ここに来てくれれば、我輩の人生も……。

そう物思いに耽るうちに、安楽椅子の心地よい律動に、眠りの海に溺れていく、晩年のナポレオンであった。

ナポレオンが、件の「赤い服」の男に初めて出会ったのは、まだナポレオンがコルシカ島に住んでいた、子供の砌みぎりだった。

ナポレオンは1769年、コルシカ島のアジャクシオで生まれた。コルシカ島というのは、地中海に浮かぶ、かなり大きな島である。丁度位置的にはフランスとイタリアの中間に浮かんでいる関係で、歴史上、その帰属が大いに争われた島でもある。また、四方を海に囲まれている島の哀しさで、よく海賊にも襲われた、という。それがためか、コルシカ島の人間はどこか芯の強いところがあり、また独立心も強い。

ナポレオンが生まれた頃にはもうフランス領だったが、フランス本国から独立する気運を度々見せていた。そんな、血の気の多い島、それこそがナポレオンの故郷、コルシカ島である。

少年ナポレオンは、そんなコルシカ島の景色を眺めながら散歩するのが大好きな子供であった。

コルシカ島は山あり海ありの、なかなか景勝地である。そんな景勝地の風景を、まるで心のパレットに写生するかのように、ナポレオン　当時は「ナブリオーネ」と名乗っていたが、便宜上こう呼ばせていただく　は目に留めていた。

そんなナポレオンを親は奇異な目で見た。それはそうだ。散歩が好きな子供なんて、枯れているにもほどがある。それに、普通、子供と言えば当時は大事な働き手である。

けれど、結局そんなナポレオンの「趣味」は後ろ指を指されながらも黙認されていた。

なぜかと言えば、ナポレオンの家が「特権階級」だったからだ。彼の家は、コルシカ島の有力者だった。だから、農家の子供のように働き手としては見られていなかったし、勝手に散歩する自由も

あつたである。

そんな少年ナポレオンが「赤い服の男」に出会ったのは、ナポレオンがコルシカ島を離れる、前の年の春のことだった。

ナポレオンは、まだ三歳だった。

その日は、やけに太陽が輝く、暖かい日だった。コルシカ島は標高が高いこともあり冬は寒い。そのため、コルシカに住む者にとつて、春の日差しは大変にまぶしい。そんな太陽の光を、ナポレオンは全身に浴びながら歩いていた。

やっぱり、あつたかい季節のほうが好きだな。

少年ナポレオンは、心の中でうんうん、と首を縦に振りながら、その日もコルシカの坂道を歩いていた。

まるで空に向かって続くような曲がりくねった坂道。太陽がその輪郭をぼやけさせ、終着点は、いつも途切れて見えない。そして、白い雲がいつもぷかぷか浮いている。天国に行く道がもしこの世にあるとするならこういう道なのだろうな、と後になってナポレオンは回想することになる、そんな坂道だったが、少年ナポレオンはこの坂道が好きだった。

長い長い坂道を登り終えると、そこにはちよつとした高台になっており、コルシカ島の1/4くらいを見渡すことが出来た。ナポレオンの住む町アジャクシオや、さらに大海原、水平線がどこまでも続く。そんな景色を眺めるのが、ナポレオンは好きだった。

僕が、コルシカ島の支配者なんだ。

そついう、子供らしい妄想に、しつかりとした説得力を与える場所。それこそがこの、高台なのだ。

ナポレオンは終生知る事はないが、ナポレオンが好きだったこの高台は、コルシカ島の歴史の中で「暗黒時代」と呼ばれる、海賊達に襲われていた頃に活用されていたものである。もちろんその利用目的は、外敵である海賊の来襲を出来るだけ早く察知するための見張り台だったのであるが。

ナポレオンの生きた時代には海賊の来襲などありえなくなり、こ

んな高台の存在は忘れ去られていた。それを少年ナポレオンが発見した、という次第なのだ。

ナポレオンは、ふかふかの下草の上に座ると、足を伸ばして景色を眺めた。誰も昇ってこない高台までの山道。そしてあくせくと回り続けるアジャクシオ市街。そして、貴族たちが毎晩パーティを開いているという、海のかなた、花のパリに思いを馳せる。

海風が高台にまで吹いてくる。下草を揺らした風が、ナポレオンの頬をかすめ、吹き抜けていった。

いつものようにアジャクシオの景色を心に刻み込むナポレオンの耳に、不意に見慣れない声が飛び込んできた。

「あ、少年。一つ聞いていいか？」

まるで風のように飄々とした声だった。

ナポレオンは空耳だと思った。

何せ、「特権階級」であるナポレオンでさえ、自分の野暮ったさに赤面してしまいそうなくらいに、その声には圧倒的な品があった。確かに言葉は少し粗野かも知れない。だけれども、その言葉の粗野さを吹き飛ばしてしまうほどに魅力的で、気品のある声。

コルシカ一番の名士で、コルシカの独立闘争の中心人物であるパスカル・パオリでさえ、こんなに洗練された物腰じゃないよ、と子供ながらに思ったナポレオンは、「きつと空耳だろう」と聞かなかつたことにしたのだ。だが。

「おいおい、聞こえない事はないだろ」

さすがに、聞き間違えでは無かつたようだ。

ナポレオンが振り返ると、そこには男が立っていた。

大体二十歳くらいだろうか。中肉中背な男。

だが、フロツグコートに白タイツ、そして刺繍入りの靴。さらにとどめのように巻き髪を施されたかつらを被っている。

この格好は、フランススイ王朝の……、つまりはパリで毎晩のように贅沢なパーティを繰り広げている、貴族たちの装束である。ナポレオンはその格好が「貴族服」であることは知らなかったが、

なんとなく偉い人なんだろうな、と思わせるに十分な格好であった。それ以上に、ナポレオンの目には、その男の着ているフロッグコート、まるで血のように鮮やかな赤が目には焼き付けられた。

その、赤い服の男は言った。

「少年、ちよつと道をお尋ねしたいのだが……」

「道？」

変な話だ。ナポレオンはそう思った。

だって、ナポレオンは、さっきまでこの高台まで上ってくる唯一の道である、あの山道を眺めていた。だが、人っ子ひとり通っていない。

この高台は山の中腹にあるから、山の上からこの男が下りてきた可能性もある。

だが、コルシカの山は標高が2000mを越え、春先まで雪が残る。こんな、貴族服を着用して登れるほど甘い山ではないのだ。

そんなナポレオンの疑念をよそに、赤い服の男は続ける。

「そう。道。ええとねえ、アジャクシオに住んでる、パオリさんの家、知らないか？」

さっきにも話に出たが、パオリ、というのはコルシカの有力者、パスカル・パオリである。大体有力者というものは、政治に口を出したり慈善事業に力を尽くしたりして有名になる。事実ナポレオンの父も、コルシカ独立運動において、パオリの補佐役を務めている。なぜかと言えば、そういう活動で中心的な役割を果たすことで、その地域において尊敬されたり、あるいは嫉まれたりして、注目されるからだ。

ここで何が言いたいかといえば、コルシカの者なら周知の事実である「パオリの家の所在」を、この赤い服の男は知らない、という事実なのである。

ああ、ヨソ者か。

少年、つまりまだ子供であるナポレオンだって、瞬時にそう考えが巡った。

すると赤い服の男はふう、と息を吐いてから、つぶやいた。

「はあく、コルシカは閉鎖的だ、とは聞いていたけど、まさかこれほどとはね……」

確かに、近世の田舎町であるコルシカは閉鎖的であったかもしれない。現在のように、「世界中、友達！」というノリにはなれない。当時は、コミュニティの結束が今とは比べ物にならないほど強かった。そういう社会においては、横の結束が強い代わり、余所者には厳しいものなのだ。

だが、コルシカの民が、この赤い服の男に対し心を閉ざすのには、他の理由がある。

「おにいさん、フランスの偉い人なんですよ？」

少年ナポレオンはそう言った。まるで、難詰するような口調で。

そんな難詰に少々戸惑いながら、赤い服の男は答えた。

「うん、まあ……ね」

「帰れ！フランスなんて嫌いだ！」

ナポレオンは、子供とは思えない剣幕で怒鳴りたてた。

当時、パオリを中心とする運動家たちが、コルシカをフランスから独立させんと画策していた。その機運は島じゅうに、まるで伝染病のように、人から人へ伝染していった。

そんな空気の中で、明らかにロココ様式の貴族服をまとった、つまりはフランス中央から来たであろう貴族が、邪険に扱われないわけがない。

ナポレオンの反応は、まさにそんなコルシカの空気を、如実に写し出していた。

【2】（後書き）

（脚注）

フロックコートに白タイツ：当時の貴族の正装。イメージできない方は、「モーツァルトの着ている服」を思い浮かべて頂ければ、ほぼよろしいと思います。

「ふむ、なるほどね……」赤い服の男は、値踏みするようにナポレオンの顔を見つめた。「こここのところ、やけに広がってるからなあ。国を蝕む病が」

「国をムシバム？」ナポレオンはまだ子供なので、その意味が判らず、ただ男の言った言葉を反芻した。

「ん、じゃあ、こんな質問でどうだ？」赤い服の男は、ニコッと笑いかけて、言った。どうでもいいが、彼の見せる笑顔は相手を安心させる、そういうった質のものだった。「君は、国王は好きか？」

国王……。ナポレオンは心の中で反芻する間もなく答えた。「嫌いだ！」

「じゃあ」男は手袋をした指を空に泳がせながら言った。「なぜ嫌いなんだ？」

え？なぜ、って？ナポレオンは考えた。

だって、父さんも母さんも、となりの兄ちゃんも、パオリさんも「王は嫌いだ」って言ってる。だから、嫌いだ。でも、誰かが嫌いだからって、「王が嫌い」にはならないだろう。あれ？じゃあなんで僕は……、こんなにも王様を嫌ってるんだろう？

「な？」不思議そうな顔をしてウンウン唸るナポレオンの顔を覗きこみながら、赤い服の男は続けた。「なぜ王が嫌いか、わからないだろう？」

ナポレオンが幼少期を過ごしたこの時代、歴史学的にはルイ王朝末期と言われるが、この時代の人々は、なぜか国王を嫌っていた。税金がとりたてて高いわけでもなければ、王様はそこまでの失政もしていない。少なくとも、こんな田舎の地主の息子にここまで嫌われるほどの失政は行なっていないのだ。

それにそもそも、田舎の地主の息子にとって、王様なんて雲の上の存在である。現在のようにその顔を写真などで拝めるわけではないのだ。そういうあまりに自分から「遠い」人間に対して、人間はそんなに憎悪を抱けないものだ。

「そう、これこそが」男は続けた。「国を蝕む病なのだ」

「ふん……？」まったく男の言い分がわからないナポレオン少年は、曖昧に頷いておいた。

瞬間、強い風が吹いた。春風特有の湿り気を帯びた一陣の烈風が高台に立つ二人を包んだ。

「さて、ところでさ」赤い服の男は、ナポレオンの前に立って、訊いた。「パオリさんの家は、どこだい？」

「えつとね」ナポレオンは立ち上がり、眼下に広がるアジャクシオの街を指差した。「あの街の……」

赤い服の男は、人懐っこくにつこりと笑って言った。「一番大きなお屋敷かい？」そして、一番大きな、赤い屋根の家を指した。

「そう！」ナポレオンの顔もほころんだ。さっきまで赤い服の男を「ヨソ者」と内心で思い警戒していたナポレオンだったが、いつの間にかその男のペースに乗せられているのだった。

男は高台から、アジャクシオの街を見下ろした。アジャクシオの、活気溢れた街並。そして船着場に浮く、船舟。そんな景色を、男は眺める。

ナポレオンも男の真似をするように、横に並んで下界を見下ろす。下草の、青臭い二オイがあたりに広がった。きつと、ナポレオンがさっきまでお尻で踏んでいた下草の二オイだろう。

「ん？あんまり身を乗り出すと危ないよ？」ナポレオンは男に注意した。だが、男は笑って応じた。

「大丈夫だ。私は死なない」

「しなない？」

そうナポレオンが繰り返したとき、赤い服の男は思い出したように言った。

「あ、もうそろそろ行かねばな」

「え？もう？」ナポレオンは、残念そうな声を上げた。

「ああ、パオリさんを待たせているものでな……、あ、そうだ」また、何かを思い出したように、男は言った。「君に、お礼をしなきゃなあ」

「お礼？」ナポレオンは両手を前に突き出して勢いよく振った。

「いいよ！！だってただパオリさんの家を教えたただけだもん」

赤い服の男はカラカラと笑った。多分、ナポレオンの仕草があまりにユーモラスだったせいだろう。笑いを収めると、男は言った。

「まあまあ、そう遠慮しなさんな。子供が遠慮するのはかわいいもんじゃないよ。それに……」

「それに？」ナポレオンは訊いた。すると、男は答えた。

「今から君に渡すものが、果たして君の役に立つかはわからない。少なくとも、この島で一生暮らそうと思うのなら、これから私が渡すものは何の役にも立たない。むしろ、邪魔にさえなるものだ。」

「だけど、これからフランスは『嵐の時代』になる。きっと、大きな混乱が、フランス全土で猛威を振るうだろう。かの、黒死病のよう」

黒死病、とはルネサンス前夜にヨーロッパで流行った病、ペストのことである。ナポレオンは黒死病に罹ったことも無ければ罹った人を見たことも無い。だけれど、街の古老が語る昔語りでは、鎌を振って多くの命を薙ぎ斬っていく、恐ろしい死神と重ねられて語られていた。だから、ナポレオンは冷や水を背中に注ぎ込まれたようにブルブル震えた。

「いや、きつと」と前置きしてから、赤い服の男は続けた。「黒死病の方ならマシかもしれない。黒死病は天災だから。だが、これからフランスで猛威を振るうのは、人災だ。人の所業によつて、多くの人が死ぬだろう」

「人が、いっぱい死ぬの？」ナポレオンは真っ青な顔をして訊いた。

ナポレオンの頭の中には、黒いローブをまとい鎌を構える死神が、人の首をまるで作物の収穫のときのように、薙ぎ払っていく様子が広がっていた。やめて、死神さん。人の首を、まるで麦を刈るように薙いで行かないで。死神は、ナポレオンの頭のなかで、ケタケタとアゴを鳴らして笑った。

そんなナポレオンの願いはむなしく、赤い服の男は言った。

「ああ、いつぱい死ぬ。少なくとも君は、人災に巻き込まれて死ぬ一人になりたくないだろ？」

ナポレオンは、首を縦にブンブン振った。

「そのためには、きつと役立つだろう」

そう言うと、赤い服の男はフロッグコートの内側から金色の鍵を取り出した。

貴族が持っている物の割に、装飾は殆ど無く、ただ金色なだけの鍵。だが、なんだろう、異様なくらいの存在感を感じる鍵だ。

「これ……くれるの？」ナポレオンはそう訊いた。だが、赤い服の男は笑って答えた。

「いやいや、この鍵はあげられない。これはすごい大事なものだ。それに、君では使いこなせない」

「じゃあ、何くれるのさ」ナポレオンはさつき遠慮したことも忘れ、チエつと唇を伸ばす。

「これだ」

それだけ言うと、赤い服の男は手に持つ鍵の先をナポレオンに向け、その手を伸ばした。

まるでその仕草は、鍵穴に向け鍵を差すようだった。

この人、なにしてるんだろ、とナポレオンは思った。僕はドアじゃないんだ。鍵穴なんてあるわけじゃないじゃないか。

そんなナポレオンの当ては外れた。

まるで、そこに鍵穴があるかのように、鍵の先はナポレオンの左胸に吸い込まれた。 「え?!え?!」

驚くナポレオン。そんなナポレオンを、何の感慨も無さそうに見

下ろす男。

左胸に刺さっているというのに、まったく痛くない。むしろ・・・

ナポレオンは鍵穴が刺さる左胸を見つめながら思った。

安心する。なんだろう。この感じ。安心とも違う。懐かしい？まさか！こんな経験はしたことがない。

男が鍵を90°ほどひねると、左胸から、「かちゃ」という音が響いた。まるで、それこそ何かの鍵を開いたような、そんな音。

そして男は、ナポレオンの胸から件の鍵を引き抜いた。

「な、な、な?!」

ナポレオン少年は、自分の左胸を、まるで生まれて初めて見るものを見るかのように、まじまじと眺めた。思わず右手で触ってみても、そこには傷などない。当然、鍵穴などあるはずもない。そんなナポレオンを見下ろしながら、男は言った。

「これで君は、己の運命に負けない人間になった。君は、国中の人が己の運命に流される中で、唯一運命を変えることが出来るようになったんだ。だが、自分の運命を変えられるかどうかは」赤い服の男はアジャクシオの街を眺めて言った。「君にかかっているんだ」

「え?ぼ、僕に?」ナポレオンが訊くと、赤い服の男は答えた。

「自分の運命を変えられるのは、自分だけ。……だつて、他人の人生を変えてあげられるほどには」男は続けた。「人は他人に興味がない」

「そういうものなの?」

ナポレオンが訊くと、赤い服の男はニコつと笑つて言った。

「そういうものさ」

また、風が吹いた。そして、ナポレオンの頬をかすめ、男の赤いフロッグコートを揺らす。風は、まるで鏡のように滑らかな水面みなもに石を落として出来た波紋のように、コルシカの木々を揺らして、去つていった。

「さて」と前置きして、男はうんと伸びをした。「もう、行くよ。じゃあな、少年」

そう言つて、赤い服の男は、アジャクシオに向かう下り坂を、ト口ト口と下りていった。

そんな様子を、少年ナポレオンはただただ目で追つた。

その夜、眠れなかった。

なぜかは判らない。だけど、まるで祭の前夜のようにワクワク感に襲われ、なぜか眠れない。なんだ、これは。ナポレオン少年は、その日は眠れなかった。

いや、眠れなかったのはその日だけではない。その日から、夜という、本来眠るはずの時間に眠れなくなってしまったのだ。

だから、ナポレオンは昼寝を取るようになった。コルシカにいる頃には、散歩の途中に寝転がって昼寝をするようになった。

後世、「一日三時間しか眠らない」という伝説で語られることになるナポレオンであるが、実はそれは日々の「昼寝」によって成されたものだった。

だが、それ以上に変わったことがある。

あの赤い服の男に出会う前のナポレオンは、どこかボーっとしたところのある少年だったが、あの日を境に急に聡明な子供になった。ナポレオンの周りの者たちが、「あのんびり屋が」と目を瞠るほどの変化だった。

あの日を境に、ナポレオンは「真実を見抜く」力がついたのだ。

例えば、パン泥棒の居場所をピタリと当てて見せたことがあった。

「あそこの炭小屋のなかだよ」と。

だが、ナポレオンに言わせれば、「あのパン屋さんは人の往来が多いから、きつと犯人は裏道に抜けたはず。でも、裏道にも人の往来はあるから、きつと犯人は近くににいるはず、という推論だよ」とのことだった。けれど、子供の推論にしては鋭いのだ。

急に神童になったナポレオンに、周りの者は戸惑った。だが、ナポレオンの父だけは皆とは違う反応を見せた。

父は、その日からナポレオンに読み書き計算を教えた。

父としても、ただの戯れのつもりだった。「神童も、勉強させればただの人だろう」と皮肉を言っただけながら、勉強を教えた。

だが、そんな父の予想は外れた。

ナポレオンは教えること教えること、全て吸収していった。まるで砂漠の砂が水を吸うように。特に、数学などはすぐに父の手に負

えないほどに成長した。

だが、字は下手だった。「はっは、神童でも出来ないことがあるのだな」と、ナポレオンの周りの人々は口々に言った。

だが、父は気づいていた。ナポレオンが悪筆なのは、字が下手だからではないことに。

父は近しくナポレオンの様子を見ていたからわかるのだ。

ヤツが悪筆なのは・・・父は思った。

ヤツが悪筆なのは、字が下手だからではなく、手が、頭で考えていることに追いついていないからだ。つまり、ナポレオンの頭の回転が速すぎて、筆が追いついていないのだ。

このことに気づいてから、ナポレオンの父は、己の息子に期待を持つようになった。そして、こう思うようになった。

“この子を、コルシカの地主の冷や飯食いで終わらせてはならない”

ナポレオンの父は、フランス本国へ移住する決意をした。

元々、そういう話があった。本国のある貴族が、「もし本国に移住してくるなら、本国でも身分を保証する」という旨の通達をよこしてきたのだ。これは、コルシカ独立運動のナンバー2であるナポレオンの父を切り崩す、本国の工作であろう。この話、どう転んでも父にはどうでもよい話だった。たとえコルシカに残っても地元の名士、本国に渡っても下級貴族。どっちにしる、あまり栄達に興味のない父には興味の持てる話ではなかった。

だが、「神童」ナポレオンの出現により事情が変わった。

本国に渡れば、爵位をもらえる上、ナポレオンを、当時唯一の学校に通わせることができる。ヤツに、然るべき道を与えれば、もしかしたら……。

そう思い至つてからの、父の行動は早かった。コルシカ独立運動のメンバーには「本国の様子を偵察する」という苦しい名目を通して、引越しの準備を進めた。

そしてナポレオンは、生まれ故郷コルシカ島を後にした。

ナポレオンが、後に権力を手に入れるまでの道程において、「フランスの本国に移住した」という出来事は、非常に大きなものだった。

まず第一に、ナポレオンの前に「軍人」としてのレールが敷かれたことが大きい。

彼はフランス本国に移住してから、まず修道院付の学校に、やがて陸軍の士官学校に入学した。このことが、ナポレオンの一生をある程度決定する事になる。少なくとも、物を売ったり畑を耕して生きるという生き方ではなくなった。

だが、それ以上に、「革命前夜のフランス」の空気を思いつきり吸ったこと、それがナポレオンの人生にとって大きな出来事であつたらう。

コルシカ島でも、理由のない「国王憎し」の声はあつたが、そこまで大きいものではなかつた。だが、花の都パリでは、もっとその声は声高だつた。

最初はナポレオン　この頃には、己の名前をフランス風に「ナポレオン」ボナパルト」と変えていた　にも、その理由はわからなかつたが、そのうち、ここまで王が嫌われている原因が見えてきた。

それは皮肉にも、フランス貴族のサロンで醸造された思想の所為であつた。

ルソーやヴォルテールといった「啓蒙思想家」の思想が、まるで伝染病のようにフランス労働者に広がり、蔓延していたのだ。啓蒙思想家たちは「国の主権は国民にある」という論を並べた。それを聞きかじった労働者たちは、王政に対して不満を抱いていたのだ。

そして、そんな不満が、ナポレオンの目前で爆発した。

1789年、バスティーユ監獄の襲撃が起った。いわゆる、フランス革命の始まりであった。この頃には軍人として働いていたナポレオンであったが、革命軍に合流した。ナポレオンとて、やはり当時の「熱病」には勝てなかった。「啓蒙思想」という熱病に、皆と同様、ナポレオンも浮かされていたのだ。

ナポレオンは、このフランス革命の嵐に自ら飛び込んでいった。まるで、上昇気流に乗ろうとする鳥のように。

だが、その上昇気流は、ナポレオンを上に向けてはくれなかった。この時期、ナポレオンは見事に雌伏の時を過ごしている。革命運動がばれて逮捕されコルシカに隠棲することになったはいいが、もはやコルシカにはナポレオンの居場所はなかった。すぐにマルセイユに移らざるを得ず、そこで嵐が過ぎ去るのを待ったのだ。

だが、この雌伏も結果としては良かったといえる。

フランス革命の最初期の混乱で、多くの人間が死んだ。歴史に「もしも」はないが、もしこの時期にナポレオンが頭角を現していたなら、ナポレオンはこの時代に多くの人間の生き血を吸った処刑具、ギロチンの刃にかかって死んでいたことだろう。

この時代に、首が胴体から離れなかった事、それこそがナポレオンの幸運といえる。

むしろ、ナポレオンを歴史の表舞台にのし上げたのは、フランス革命に反発した諸国と、フランス政府の戦争である。「フランス革命戦争」であろう。

フランス軍は弱かった。それは、革命軍側に優秀な将官がいなかったからなのだが、それによってナポレオンにもツキが回ってきたのだ。

元々優秀な将官で、砲兵だったナポレオンは革命軍の中でメキメキと頭角を現した。

トントン拍子で出世を続け、気がつけばイタリアの遠征軍のトップにまで登りつめた。この当時、弱冠27歳である。

だが、ナポレオン率いる革命軍は連戦連勝、イタリアと休戦条約を結ぶまでに大活躍し、さらにはオーストリアも屈服させた。この大活躍で、ナポレオンは一躍祖国の英雄とまで呼ばれるようになった。

そんな、「祖国の英雄」ナポレオンの前に、赤い服の男は、何の前触れもなく現れた。

その時は夜だった。カンテラに火をともし、地中海の地図を眺めながら、黒い軍服姿のナポレオンは唸っていた。

「イギリスの力を押さえ込まないことには……この戦争、勝てんぞ」

ナポレオンは、地図に浮かぶグレートブリテン島を、苦々しげに眺めた。

そうなのだ。イタリアとオーストリアを落としただけではこの革命戦争は勝てないのだ。いや、オーストリアが抜けた意味は大きい。実質、この革命戦争の主役はオーストリアなのだ。だが、イギリスがまだ諦めていない。イギリスが孤軍奮闘しているのだ。

イギリスを撤兵させないことには、革命戦争に勝つたことにならないのである。

「何か無いか……何かいい手は……」

イギリスを撤兵させるいい方法。それを考えるナポレオン。だが、何度考えても、一つしか思い浮かばなかった。

「エジプトを陥落^とる、これだな」

ナポレオンは、地図の上のエジプトを指差した。

当時、イギリスはインドを植民地にしており、インドとの交易が国益につながっていた。その交易の際に、イギリスはエジプトを経由していたのだ。

つまり、エジプトを封鎖すればイギリスの通商破壊が出来る。そうすれば、少なくともイギリスの国勢を弱める事ができる。運がよければイギリスの影響力を、地中海から締め出すことも可能かも知

れない。さらに、エジプトを支配下においておけば、様々な布石にもなる。考えれば考えるほど、エジプトは陥落させておくべきだ。

不意に、風がナポレオンのいる部屋に吹き込んだ。

「ん？我輩、窓を開けておいたか？」

そうつぶやきながら振り返ると、そこには赤い服の男が、あの頃と全く変わらない姿で、立っていた。

「ああ、君は窓を開けていない。何せ、私が開けたのだから」そう言って笑う赤い服の男の後ろでは、窓が風に吹かれてキイキイ鳴っていた。

ナポレオンはわが目を疑った。目の前には、あの頃と全く変わらない男の姿。

あの男、まさか、あの男か！？でも……。

ナポレオンは男の顔をまじまじと眺めた。

なんで、こいつ、歳を取っていない？

そう。赤い服の男は全く歳を取っていないかった。初めてこの男に会ってから20年以上経っている。その20年の時の流れは、ナポレオンを子供から青年にした。だが、この赤い服の男は、時の流れというくびきから逃れたように、全く歳を取っていない。どういうことだ？

「はっは」男は笑った。「なぜ私が歳を取らないか、不思議かね？」

それはそうだろう、とナポレオンが言うと、また男は笑った。

「いつぞや話したと思うが」男は言った。「私は死なない」

「ふん、まあいい」ナポレオンは疑念をとりあえず飲み込んでからそう言うと、椅子に腰掛けた。「ときに、どこから入ってきた？」

男は、客用の椅子に腰掛けて言った。「いや、あの窓からパツと赤い服の男は親指でキイキイ鳴る窓を指した。」

「そうじゃない」ナポレオンは続けた。「この部屋に、ではない。この建物に、どうやって入った？」

ナポレオンが今居るのは、リユクサンブル宮殿という宮殿の一

室である。

普通、ことういう「宮殿」と名のつく所は大変警備が厳しい。それこそ、「猫の子一匹」侵入させないはずなのだ。

事実、このリユクサンブル宮殿はものものしい警戒態勢をしいている。これなら「猫の子」どころか「ネズミの子」すら通さないのではないか、と思わせるに充分なほどである。

赤い服の男は笑った。

赤い服の男は言った。「私に、不可能は無いよ。例え、ここがフランスで一番警備が厳しい所であったとしても、だ」

ナポレオンは思わず人を呼ぼうと、手を叩こうとした。

宮殿に無断侵入する輩など、怪しい以外の何物でもない。しかも、今ナポレオンの目の前にいる男は、ナポレオンと顔見知りだ、という点に目をつぶれば、ロココ様式のフロックコートに白いタイツ、それにカツラという、明らかに革命政府とは一線を画しているということをいでたちで示したような男だった。

未だ、フランス国内には国王を、いや、正確には王政を支持する連中も多いのだ。

だが、ナポレオンが手を叩くより一瞬早く、赤い服の男は指をパチンと鳴らした。

「な、何を……」

ナポレオンが訊くと、男は不敵な笑みを浮かべて答えた。

「うーん、邪魔者が入ると面倒なものでね。ちよっと眠ってもらった」

「な！？バカな！」

ナポレオンは、手を叩いた。いつもの手はずなら、隣の部屋に控える衛兵が將軍であるナポレオンを助けにやってくるはずだ。しかし……。

手を叩いた音が響くばかりで、衛兵がやってくる様子は無かった。

男は、言った。

「な？だろ？」

ナポレオンは思わず部屋から飛び出した。そして、暗い廊下の左右を見渡す。だが、いつも真面目に警備しているはずの兵士たちはその定位置で崩れ落ちている。

「おい！大丈夫かね！！」

ナポレオンは兵士の一人を揺さぶった。だが、兵士はナポレオンの揺さぶりに反応せず、頭は揺さぶりに任せるがまま揺れる。

毒でも盛ったのか？ナポレオンはそう思った。だが。

ぐー、ぐー。

幸せそうな、兵士のいびきが廊下に響く。赤い服の男の言うとおり、兵士たちはよだれを流して眠っている。

「な？言っただろ？」

ナポレオンは何だか怖くなり、隣の衛兵の控え室に駆け込んだ。

「やれやれ・・・」とつぶやく男の言葉を背中で聞きつつ。

控え室に、まるで転がり込むように入ったナポレオンは、振り返り、ドアに鍵をかけた。

「衛兵！なににして・・・」

ナポレオンは、さっき生じたばかりの恐怖の八つ当たりを、衛兵にぶつけようとした。だが、それは叶わなかった。

衛兵達も、ある者は地面に崩れ落ち、またある者は机に突っ伏したりして、眠りの世界に溺れていた。

ナポレオンは、アゴがカタカタ震えているのを自覚していた。

こ、怖いのか？我輩が、あの男を、恐れているとでも？バカな。

我輩はフランス救国の英雄・・・。

「ナポレオン！！ボナパルト、だろう？」

ナポレオンの後ろには、あの赤い服の男が立っていた。馬鹿な！さつき鍵は確かに掛けたはず・・・。なのになぜ・・・。恐怖で震えるナポレオンの後ろで、男は続けた。

「あのコルシカの少年が、まさかここまで成りあがるとは・・・。おめでとう。よく、あのフランス革命の嵐を切り抜けた」

恐怖で震えるナポレオンは、言葉が出なかった。男は続ける。

「だが、君の正念場はこれからだ。これから君は、大きな決断に迫られるだろう。だが、迷ってはいけない。次の場面では、果断さが大事だ」

「か、果断さ、だと？」ようやく口から出た言葉がそれだった。そんなナポレオンの言葉に、男は恭しく頷いてから続けた。

「君は悩んでばかりだ。その結果、君は胃を痛めている」

ナポレオンは、出し抜けに射抜かれたような気分になった。

ナポレオンという将軍は、「綿密に計算された戦争」をモットーにしていた。必ず勝てる戦法、必ず勝てる戦を志向した。それは、完璧主義とも言い換えできるだろうが、それは将軍としては致命的な個性であった。というのは、戦争というのはいくら万全を期したとしてもなお負けることがあるからである。逆に、まったく策を練らずとも、ものの弾みで勝ってしまう事もある。戦争というのは、多分に博打性が高いもので、戦を操る将軍たちもある程度「戦争の博打性」を理解しておらねばならない。戦争という巨大な事業において、全ての不確定要素を把握できるほどには、人間は頭が良くは無いのだ。

ナポレオンという将軍は、その不確定要素をすべて掌握しようと努め、その結果胃を病んだのである。

「だ、だまれ！私の行なってる戦は、負けることが許されない戦なのだ！」

ナポレオンは、急に痛み出した胃をさすりながら言った。だが、男は笑った。

「ああ、今までは、な」

「い、今までは、だと？」ナポレオンの顔は疑念と恐怖の入り混じった、妙な顔になった。

すると赤い服の男は指を立てて、言った。

「ああ、君がこれまでしてきた戦は、祖国を守る戦だった。確かに、そういった戦争では負けは許されない。負ければ、すなわち亡国だからだ。」

「……だが、今君が頭の中で思い描いている戦は、直接的に祖国を守る戦ではあるまい？」

思わず目を瞠るナポレオン。

なぜこの男は、我輩の次の一手を知っている？いや、カマをかけたているのか？

ナポレオンの頭の中には、そんな疑念がぐるぐると荒れ狂う竜巻のように渦巻いていた。

男は続けた。

「君が次に狙うのは、エジプトだろうか？

だが、フランスにとってエジプトは、領土ではない。そういう戦なら、負けても問題はないだろう？」

男の言うとおりだ。

エジプトを封鎖できればイギリスの通商に大打撃を与える事ができる。確かにそれは、未だにフランスの目と鼻の先で影響力を持つイギリスへの牽制の意味を持つ。だが、牽制できなかったところで、本国が決定的な打撃を受けるわけではないのだ。

だが。

ナポレオンは吼えた。

「我輩には負けは許されん！！いや、我輩自身が許さん！」

ふ、と赤い服の男は笑った。そして、言った。

「ならば、必ず負けぬ、と叫び続けるといい。ならば、君が負けることは無いだろう」

「……それだけ言いに来たのか？」ナポレオンは訊いた。

「あゝ、いやいや、違う違う」男は手を振って否定した。「君の耳に、入れておきたい話がある」

我輩の耳に？なんだ？だが、……。

この男の話ならば、有用なものにちがいない。そう、なんの確証もなく思うナポレオンなのだった。

「君に伝えるべき事は」赤い服の男は指を二つ立てた。「二つある」

狭い衛兵の控え室。窓は開いていなかったが、まるで北風が吹き込んだかのように、周りの気温がグツと落ちたように感じた。窓から、月の光が零れ落ちている。

「なんだ？伝えるべきこと、とは？それに、二つも？」

ナポレオンは何とはなしに唾を呑んだ。男は、言った。

「一つは世俗の話。もう一つは君自身の話、だ。どっちから訊きたい？」

どっち、だと？

ナポレオンは少し悩んだが、答えた。

「世俗の話、とやらを先に聞こうか」

ナポレオンにとって、自分の話など興味のあるものではない。ナポレオンに興味があること、それは「自分自身のこと」ではなく、「自分が世の中に何を為すか」なのだ。そして、ナポレオンは好物を先に食べる性質である。つまり。

ナポレオンは、訊きたい話題を、先に所望したわけだ。

「さすが、だね」

赤い服の男は、笑顔を見せた。

「何が、おかしい？」ナポレオンは少し苛立ちながら訊いた。

「ああ、いや失礼」男は笑いを抑えて言った。「君なら、そう言うと思ったのだ。自分のことより、はるかに周りのことに興味があるのだからな」

「はやく」ナポレオンは苛立ちを隠さず、言った。「話を進めてくれないか」

「おお、悪い悪い」赤い服の男は呑気に手をポン、と叩いた。ま

るで、今気づいた、と言わんばかりに。そして男は、話を切り出した。

「ネルソン、って知っているか？」

ナポレオンは頭をひねった。「知らんな。地名か？人名か？」

すると、男は奇妙な顔をした。「呑気なものだな。これから君と闘うであろう、イギリスの軍人の名だ」

「何?!」思わずナポレオンは身を乗り出した。

これから闘う国の軍人の情報。一軍を預かる將軍にとっては、喉から手が出るほど欲しい情報である。

「だが……」フランスの一軍を預かる我輩が、なぜイギリスの海軍軍人の名を知らぬ？ナポレオンはさらに首をかしげた。

「まあ」首を傾げるナポレオンをなだめるように、男は言った。

「まだソイツはせいぜい戦列艦の艦長だからな」

ナポレオンは拍子抜けした思いであつた。

戦列艦の艦長、と言えば、陸軍に換算すればせいぜい500人を率いる部隊長くらいのものだ。そのくらいの将、地中海にごまんといる。

少なくとも、数万の兵を率いる立場になつたナポレオンにとっては、取るに足らない塵芥、小物の将でしかあるまい。

だが、ナポレオンは不安になつた。この、赤い服の男がわざわざ言上げる程の男なのだ。もしかしたら、それは、我輩を脅かす存在なのかもしれない。

「そう。察しの通り」赤い服の男はナポレオンの顔を覗きこみながら言った。「君を脅かす存在だ」

赤い服の男は、その男について語り始めた。

「なかなか、果敢な男でな。ある意味、君とは好対照だな。彼の戦ぶりを見たことがあるが、なかなか強引、かつ蛮勇。君の戦ぶりを騎士の戦い方と喻えるのなら、彼の戦ぶりは……そうだな、ゲルマン戦士の戦い方、とでも言えようか。

とにかく、伸るか反るかの戦を張り、カンで戦場を渡る、そんな

男だ」

「ふん、そんな暗愚な将、恐るるに足らん」ナポレオンは、そんなネルソンを一蹴した。

緻密な作戦を重ねに重ね、その上に砲台や城を築き、さらにその上に兵士を乗せて闘うナポレオンにとって、そんなネルソンの戦い方は「蛮勇」でしかないのだ。

しかし、このナポレオンの感覚はある程度しょうがないことでもある。

そのナポレオンの発想は、「陸軍軍人」としてのものであるし、一方のネルソンのそれは「海軍軍人」のものなのだ。

陸における戦争、というのは有史以来の積み重ねがあり、それによりある程度の予測や定石というものが確立されている。それに、陸戦における兵力の最小単位は「人」であるから、すぐに補充が利く。それがため、長期化するのも特徴である。そういう長期化した戦争には、「緻密な作戦」が生きているのである。

だが、海戦、というのは、当時陸戦ほどの積み重ねが無かった。また、兵力の最小単位が「船」のため、補充があまり利かない。つまり、どうしても海戦は短期決戦になってしまう。そういう環境では、そもそも「緻密な作戦」を立てることが困難であるし、やはり「カン」のようなものに頼る部分も多かった。

おそらくネルソンに、ナポレオンの戦争観を話せば、鼻で笑って一蹴することだろう。「戦争は、伸るか反るかかの博打みたいなモンだ！」などと言って。

「まあ、そう言うな」赤い服の男はそんなナポレオンをなだめた。そして、続けた。

「だが、コイツは本当に怖いぞ。
……ヤツは、頭も回る。頭がよく、その上フットワークも軽い……この上無く強い」

バカな。我輩の緻密な作戦を破れるか、と言おうとしたナポレオンだったが、話が平行線になるのを恐れて、心にもない言葉を吐き

出した。

「……………そうか。胸に留めておこう」

「ああ」赤い服の男は、少し不服そうに声を上げた。

「そう言えば」ナポレオンは思い出したように訊いた。「もう一つ、我輩に助言があるのではないか？」

「ああ」思い出したように、赤い服の男は声を上げた。「そうそう。あるある。忘れてた。とは言っても、たった一言なんだけれどね」

ナポレオンとしてはどうでも良い話題ではあるが、一応訊いておこうという気分になったのだ。

男は、ナポレオンの方を見ると、一言言った。

「一度の敗戦くらいで、歴史の表舞台から去らないでくれよ？ ナポレオン」ボナパルト将軍？」

そう言い終わると、男は指を鳴らした。すると、男から強烈な光が発せられた。

「な！？これは！？」ナポレオンは目を細めた。

光の中で、確かに男は笑っていた。その男特有の、人懐っこい笑顔で。だが、そんな光景も、一瞬で光に塗りつぶされ、完全に真っ白になってしまった。そんな真っ白な光景の中、男の声が響いた。

「また会おう」

次の瞬間には、さっきまでの部屋に戻っていた。ただ違うのは、さっきまでこの部屋にいたはずの赤い服の男が消えうせている、という点だけ。

部屋には、目を大きく見開きその場に立ち尽くすナポレオンと、グーグー寝息を立てる衛兵達の姿が、月光に照らされていた。

「あ、あれ？……………ん……………な、將軍閣下！！」

やがて、衛兵たちも目を覚ました。ナポレオンは、「居眠り」をしでかした衛兵達を見渡した。ナポレオンに居眠りを見られた衛兵達は、バツが悪そうに視線を泳がせている。

だが、ナポレオンはそんな衛兵達に、優しい言葉を投げかけた。

「君達、職務怠慢はよくないな。……だが、今日は気分がいい。今日のこととは目をつぶろう」

そう言っつて、眠い目をこする衛兵達がたむろする部屋を後にした。だが……。ナポレオンは思った。なぜ我輩は気分がいいのだ？

今日あの男がした話は、到底いいものではなかった。特に二番目の話など、暗に敗戦を示唆するような内容だった。いつものナポレオンだったら、机を叩いて反論するか、いつものようにくよくよと悩んでいたことだろう。

だが、なぜか気分がいい。

ナポレオンは、比較的軽い心と足取りで、自らの執務室に入っついった。

赤い男の来訪から数ヶ月後、ナポレオンの「エジプト遠征論」が認められ、遠征が成った。

当時のナポレオンとしてみれば得意の絶頂だったろう。自分の考えた戦略が、国家の存亡に関わる大戦略と認められたのだから。

だが、歴史的に見れば、このナポレオンのエジプト遠征は大失敗だった。

結果として言えば、フランスはエジプトに影響力を残せなかった。つまり、イギリスの通商破壊は叶わなかったのだ。

序盤戦は良かった。

ナポレオンたちフランス遠征軍は、フランスの動きを察知して地中海で網を張っていたネルソン率いるイギリス海軍の追撃をかわし、エジプトに上陸できた。また、エジプトでの陸戦も、連戦連勝だった。だが。

ネルソンに、してやられたのだ。

その陸戦の間に、エジプトのアブギールという港に停泊していたフランス艦が、遅ればせながらもフランス軍に追いついた、ネルソン率いるイギリス海軍によってすべて撃沈されてしまったのである。無論、ナポレオンは、背後に迫るネルソンの影を感じていた。だからこそ、フランス戦艦は、当時海軍の戦術における鉄壁の陣を敷かせ、イギリス軍に備えたのである。

だが、ネルソンはナポレオンの一つ上を行った。ネルソンは、フランス海軍の迎撃体制を妙手で切り抜けて見せた。鉄壁に守られたはずだったフランス海軍は、その心の虚までも衝かれ、総崩れとあいなった。

この海戦の敗北によって、ナポレオンたちフランス軍は本国から孤立する形になった。

エジプトを封鎖してイギリスを「兵糧攻め」にするはずが、イギリスによって「兵糧攻め」にあう形になってしまった。

ナポレオンはぎしぎしと歯噛みするしかなかった。

ネルソンめ……。やってくれる。だが……。ナポレオンは、軍の帷の中で考える。

これは、我輩の失態だ。

ネルソンの恐ろしさは、あの男が忠告してくれていたではないかなのに、定石の手を打つだけで満足し、更なる一手を考えていなかった。情報を知りつつ、それを活用できなかった。我輩の、失態である。

ナポレオンの胃が、獐猛な肉食獣に食い散らかされたかのように、ぎりぎりと痛んだ。

だが、ナポレオンの胃の痛みは、さらなる苦難によって、深いものになっていく。

ネルソンの手によりフランス海軍が総崩れにされる直前まで、エジプトの半分を支配下に置いていたフランス軍であったが、現地の支配に失敗しつつあった。エジプト住民による蜂起の数々、そしてそれを武力で制圧するフランス軍。その二者に、信頼関係など生まれるはずも無かった。

さらに、エジプトの、まだ支配下に置かれていない地方の征服に難航することになってしまった。

そして、中東に控えるオスマン帝国もまた、ナポレオンと対立することになった。

これによりナポレオン率いるフランス軍は、地中海にはイギリス軍、南にはエジプト軍、東にはオスマン軍の影、という包囲網の只中に孤立する形になってしまった。

ナポレオンも、何もしなかったわけではない。

オスマン軍を牽制するためにシリアに遠征したものの、芳しい成果はあげられなかった。

フランス軍は、どんどん追い詰められていった。

「將軍、お休みになられては如何です？もう三日は寝ていらつしやいませんよ」

「氣遣い結構。……君も、我輩と同じく三日寝ていないだらう？君こそ寝たまえ」

側近の氣遣いの言葉を、氣遣いの言葉で返すナポレオン。だが、その心中は表面に出る言葉ほどには穏やかなものではなかった。

ナポレオンは、ここ三日寝ていない。いや、正確には、「眠れない」のだ。

失敗しつづつある征服地の支配。芳しく無い戦果。そして、これからの戦。その全てが結集して一振りの剣となり、ナポレオンの腹に刺さっていた。そして、その剣は、ナポレオンの血を吸って、さらに大きなものになっていく。

ナポレオンは、思わず目の前の机に突つ伏した。ナポレオンの座る椅子が、悲鳴を上げるようにキィ、と鳴った。

「……我輩は寝る。君は下がりましたまえ」

ナポレオンがそう言うと、側近は何も言わずに部屋を後にした。

その拳動を耳で確認すると、ナポレオンは大きくため息を吐いた。

ナポレオンには、わかつていた。この戦争には、もう何の益もないことに。

イギリスの通商破壊にももはや失敗。それどころかそのイギリスに退路を絶たれ、孤立してしまった。しかも、兵士たちの士気も低く、統率もうまくいっていない。そんな状況で、オスマン軍とエジプト軍と闘わねばならない。

この状況、どう考えてもジリ貧だな。ナポレオンはため息を吐いた。

士気の低い征服軍に、士気の高い防衛軍、その数の多寡に関わらず、結局は後者が勝つ。それは、ナポレオン自身が「士気の高い防衛軍」を最近までしていたこともあり、きつちりと理解している。

そして、本国の方でも動きがあったようだ。

どうやら、またオーストリアがフランスに侵攻しているようなのだ。

この状況では、早めにエジプト遠征を切り上げ、本国に戻るしかない。

だが、敵がこれだけ居る中で、そんなことができるはずがない。数万のフランス軍が本国に帰る動きを、包囲する連中が気づかないはずがない。

だが……。

ナポレオンは突っ伏した姿勢のまま、顔だけ上げた。

我輩は、こんなところで死ぬわけにはいかない。そう、強く想った。

我輩は、フランスを救うんだ。祖国を蝕む、ルイ王朝の王から。周りの国々から。

ナポレオンという男を動かしていたのは、常にそれだった。「祖国を守る」、その思いこそが、ナポレオンの心の大部分を占めていた。

だが、ナポレオンは気づいてなかった。実は、ナポレオンを動かしていたもの、それは「祖国を守る」というものだけではなかったということに。そして、今この瞬間に、そのもう一つの想いが、ナポレオンの心という土壌から芽吹き、育ち、花を咲かそうとしていたことに。

その瞬間だった。

ナポレオンの胃の痛みが一瞬の内に、まるで魔法のように引いていった。ナポレオンは自分の中に力がみなぎっていくのを自覚した。

「我輩は……。」

ナポレオンの心に収まりきれない思いが、口から洩れ出ていく。目には、強さがあった。だが、その目はもはや、愛国心に燃えた青年将校・ナポレオンの目ではなかった。その目で、ナポレオンは虚空を睨んだ。

「死ぬわけにはいかぬ。我輩は、ナポレオン＝ボナパルトである

！

その次の日の夜、ナポレオンは側近を連れ、密かにエジプトを脱出した。数万のフランス軍を置きざりにして、である。

そして、猛禽のような目をしたナポレオンは、フランスに帰還した。

フランスに帰還したナポレオンがまずしたこと、それは権力の掌握であった。

ナポレオンはクーデターを起こし、自らを首班とする政府を樹立したのだ。

クーデター、これもナポレオンの寿命を長めた。もし、ナポレオンがこのクーデターを行なわなかったら、ナポレオンは皇帝まで登りつめることはなかった。確実に処刑されたはずだ。と、いうのも、当時のナポレオンはエジプトでの「敵前逃亡罪」が問われていたからである。将官の敵前逃亡は、死を賜うのが決まりであった。だが、ナポレオンは、それを回避するために、自分に死を賜う側、すなわち当時の政府に死を贈る、という荒業をやつてのけた。

さて、この後のナポレオンは、確実に権力の階段を駆け上ることになる。

1799年、ナポレオン、第一執政就任。

1802年、ナポレオン、終身執政就任。

そして、1804年には、皇帝にまで登りつめた。

この行動は、いままでのナポレオンのものではなかった。

エジプト遠征までのナポレオンはあくまで軍人畑を延々と歩いてきた。だが、クーデターを起こしてしまったことで、ナポレオンは政治家の道をも進むことになってしまったのだ。

ナポレオンはこの頃より、一人で執務室にすることが多くなった。第一執政に就任したところから度々暗殺未遂事件に巻き込まれたナポレオンは、人と距離を取るようになった。きつとこの頃から、ナポレオンは孤独を感じ始めていたのだろう。

だが、そんな中でも、ナポレオンはあることを部下に命じていた。「赤い服の男を探せ」

もはや、ナポレオンが信用していたのは赤い服の男だけだった。ナポレオンは、赤い服の男を手元に置いておきたい、と考えたのである。

だが、見つからなかった。

そもそも、赤い服の男の素性はまるでわからないのだ。わかることと言えば、せいぜい「赤い服をまとった、貴族風の男」という情報だけ。それをフランス中、いや、ヨーロッパ中から見つけ出すのは不可能であろう。

だが、ナポレオンは諦めなかった。何度も何度も探させた。

さて、これからのナポレオンについて、説明することもあるまいが、さらりと説明しよう。

ナポレオンが皇帝位に就いたことは、ヨーロッパ中に衝撃を与えた。その結果、またもやフランスは各国と戦火を結ばざるを得なくなってしまう。ナポレオンは、また戦場を駆けざるを得なくなったのだ。だが、ナポレオンは、対峙する者に悪魔を連想させるほどに緻密な戦略で、これを迎え撃った。結局この時期にフランスは、イギリス、スウェーデンを除くヨーロッパ各国を影響下に置いた。ナポレオンの絶頂期である。

だが、皇帝ナポレオンは落日のときを迎える。

ロシア遠征で大敗を喫してしまったのだ。ロシア側の焦土作戦に疲弊したフランス軍は、見事にロシアに負けてしまった。

この敗北だけなら、まだよかったのかもしれない。

ロシア遠征の失敗を好機と見たヨーロッパ各国が、ナポレオンへ反旗を翻したのだ。

ロシア遠征での兵力の消費を回復できなかったフランス軍は、ほとんど他国軍に押し込まれていった。「士気の低い征服軍より、士気の高い防衛軍の方が強い」のだ。

そして遂には、フランス軍の独力では跳ね返せないほど何重にも囲まれた包囲網が完成してしまった。ヨーロッパ中の、ナポレオンに対する怨嗟の声が、フランスを取り囲んでいた。

ナポレオンは、この窮状を、自分の保身を図る方向で終息しようとした。要は、条件付きでの帝位の退位を狙ったのである。

だが、それは叶わなかった。味方の將軍、つまりは飼い犬が、ナポレオンに対しクーデターを起こし、ナポレオンを無条件退位に追い込んだ。そして、ナポレオンはエルバ島の小領主にまで落とされることになった。

そんな頃、また、あの男は現れた。

その日、ナポレオンはパリ郊外の宮殿の一室にいた。

部屋の外にも、小さな宮殿の建物内にも、建物の外にも兵士たちが屯^{たむろ}していた。無論、ナポレオンを守るためではない。ナポレオンが逃げ出さないように、という配慮からである。だが、それでも、ナポレオンはそれなりの格式を以って扱われてはいた。要は、エルバ島に流されるまで、この小さな宮殿に軟禁された、ということだ。ナポレオンは、部屋で唸っていた。

「おのれ、なぜ我輩がこんな目に……！我輩は皇帝にまで登った身であるぞ！」

椅子に座って、ナポレオンは右手に持つワインのグラスを、自身への怨嗟と一緒に傾ける。

「宮殿」とはいえ、皇帝の頃過ごしたそれとはまるで格式の違う宮殿に、ナポレオンは少々辟易していた。それに、ワインだって皇帝の頃飲んだもの比べれば下等のものだ。

ふふ。ナポレオンは嗤った。
退位、という事象は、あまり実感の無いものではあったが、住むところや飲み食いするものが変われば自ずから理解できるものなのだ。

そう。ナポレオンの退位騒動は、ナポレオンにとってはあれよあれよの間に決まってしまう、全く実感がなかったのだ。

いや、もしかすると……、ナポレオンは、口に含んだ安ワイン（とは言っても、普通に考えれば高級なワインである）を喉

の奥に流し込みながら考えた。

我輩の人生そのものに、あまり実感が無い。思わずナポレオンは部屋を見渡した。

この部屋は、確かに皇帝まで登りつめたナポレオンには似つかわしくない。だが、「コルシカの地主の息子」の部屋ならば、むしろ身に余るくらいだ。いつの間に、我輩はこの部屋を「我が身には合わぬ」と言えるような人間に成り上がったのだろうか？

思えば。ナポレオンは心の中で続ける。

我輩は、我輩以外のものによってここまで連れてこられたのではないか？我輩の意思とは関係なしに……。

そう思うナポレオンの頭には一人の男の顔が浮かんだ。あの、赤い服の男の人懐っこい笑顔が。

まさか……、アイツの手によって我輩は……。

あの男は、少年時代のナポレオンに、「鍵」を差した。思えば、ナポレオンが利発な少年になったのはあの時からだ。そして、ナポレオンはその「利発さ」を「明晰」「秀才」に造り替え、己の武器とした。そして、軍人として、政治家として権力という巖を登っていった。

そうか。あの男が……。ナポレオンがそう思った、丁度そのときだった。ナポレオンは、あることに気づいた。

なにやら、外が騒がしいな。

ナポレオンは思わず外を見る。ナポレオンの今いる部屋は二階の部屋で、窓からは宮殿の前庭が見える。そして、いつもだったらその庭の所々に、360。様々な方向を向いて立つ兵士達を眺めることができる。だが、今日は兵士達の様子が違う。

兵士たちが、なぜか皆ある一点を見つめている。そして皆口々に何かを叫んでいる。恐らく、「ここは部外者立ち入り禁止だ！」とでも叫んでいるのだろう。最初は穏やかだった兵士の口調がエスカレートしていくところを見ると、どうやら叫ぶくらいでは異状は払拭できなかつたらしい。そして、兵士の金きり声が、ある瞬間から

悲鳴に変わった。

「な、なんだ？」

思わずナポレオンは椅子から立ち上がり、窓から外を眺める。すると、宮殿の美しい前庭の周りを警護しているはずの兵士たちが、さつきまである一点を注視して叫んでいたはずの兵士たちが、皆地面に突っ伏している。

ナポレオンは窓を開け、身を乗り出して叫んだ。

「大丈夫かね！？何があったのだ！」

だが、誰一人としてナポレオンの声に答える者は無かった。

ナポレオンはにわかにも身の危険を感じ、窓から離れ、自らを守るため、細身の剣の鞘を掴んだ。この剣はナポレオンがまだ一介の軍人だったころからの佩刀である。だが、砲兵出身のナポレオンは、この剣を実戦で抜いたことはなかった。軍人だったころは砲弾を使っていたか、あるいはそんな剣を使うような立場に無かったのだ。

それに、ナポレオンは剣の腕はからきしであった。こんなときのために、剣も学んでおくべきだった。と、後悔するナポレオンだったが、もはや遅い。

ナポレオンの予感は的中した。

兵士達の悲鳴が、どんどん近づいてくる。「うぎゃー！」「ぐおー！」という、兵士達の悲鳴にならない悲鳴。それが、どんどん近づいてくる足音のように響いた。

どんどん、その「足音」は近づいてくる。さらに、兵士たちの悲鳴と共に、兵士の体が思いつきり床や壁にぶつかる、嫌な音も響いてくる。

メキヤ。バリイイ！！

まるで、獲物を食い散らかす群狼のような音を立て、どんどん何者かが近づいてくる。

ナポレオンは唾を呑み、剣を抜いた。一瞬、剣身がきらりと光った。

しばし、沈黙。と………。

コツコツコツ……。

足音だ。ナポレオンはそう思った。足音からして……たつた一人だ。

足音は遂にナポレオンの部屋の前まで差し掛かった。さっきまで響いていた野蛮な音の主とは思えないほど、穏やかで、まるでワルツのような優雅さを秘めた足音。その足音が、ナポレオンのいる部屋の前で止まった。

ナポレオンは、右手に持つ剣を、たどたどしく構えた。

コンコンコン。

ドアをノックする音が、部屋中に響いた。まるで、審判の槌のようだ。

ナポレオンは、ノックされたドアを、まるで異界の怪物を見るような目で睨んだ。そして、右手の剣の柄を、せめてもの気休めに、ぎゅっと握り締めた。

こんなときのために、剣を学んでおけば良かった、と後悔が頭の中で渦巻くナポレオンであったが、もう遅い。後悔、というヤツは、洋の東西を問わず先には立たないものなのである。

そんなナポレオンを急かすように、また部屋がノックされた。

「……ど、どうぞ」

ナポレオンは、少し肩が震えながらも、平静を装おうとした。おかげで、声はさほど震えていない。ナポレオンは、いよいよ剣の柄を強く握った。

「ん？なに震えた声を出している？」

そう言っ、ドアを開けて入ってきたのは、懐かしきあの男、「赤い服の男」であった。

以前会ったときと変わらぬ、赤いフログコートに白タイツ、そして、巻き髪のかつら。そして、やはり年恰好は若いままだ。ナポレオンは、もう壮年だというのに、彼は全く歳を取ったようには見えず、20歳代のいでたちのままだった。

だが、いつもと違う点もあった。それは、彼が、貴族服に似合わない、殆ど装飾の無いサーベルを、抜き身のまま、肩に担ぐようにして持っていた点である。

「あ、ああ……。なんだ、あなたか」

ナポレオンは、剣を鞘に納めた。そして、剣を、緊張感と一緒に近くの壁に立てかけ、赤い服の男に問いかけた。

「さっきの騒ぎの原因は……。あなたか」

すると男は、サーベルの峰で肩をポンポン叩きながら言った。

「あ、ああ、そうだよ？悪かったかな？……いやね、見つからないように侵入しようとしたんだけどね、ばれてしまって。それで、この通り、強行突入」

「殺つたのか？」

ナポレオンがそう訊くと、男はサーベルをかざした。その刀身には、血糊も脂の曇りもついていなかった。

「はは、バカ言っつな」男は続けた。「あの兵士達には私怨がまったくない。みくんな、峰打ちで済ませた」

「ミネウチ？」ナポレオンは頭をひねった。すると、男はウンチクを垂れるように言う。

「東洋の島国の刀術だね。刀の刃の無いほうで敵を叩いて、無力化する技術だ」

それを聞いて、ナポレオンは不思議に思った。

剣という物は、「斬る」「突く」……つまりは相手の体に裂傷を作り出す武器である。にも関わらず、東洋の島国ではその剣を使いつつも、裂傷を作らないような技を編み出している。敵に裂傷を作りたくないのなら、最初からメイスのような打撃武器で戦えばいいのである。

その東洋の島国の連中は、それが思い浮かばないほど幼稚な連中なのか、それとも、文化的な事情があるのか……ナポレオンの思案は止まらない。

そんなナポレオンをよそに、赤い服の男はぼやくように続けた。

「に、しても、文明の利器というものは、人を弱くするからいけないな。銃火器の発明と普及によって、確かに軍隊の実力は飛躍的に上がったが、一方で兵士一人ひとりも弱くなっている。嘆かわしいことだ。もはや、たった一人の武勇で、戦が動く時代ではないのかもな」

そう言うと、赤い服の男は右手に持つサーベルをポイツと投げ捨てた。地面に落ちたサーベルは、ガシャンと盛大な音を立てつつ、鏢を中心として、しばらくくるくる円運動を描いていたが、すぐに

止まった。

赤い服の男は、そのサーベルの刀身を思いつき踏みつけた。部屋中に、メキ、つという鋭い音が響いたかと思うと、サーベルの刀身はパキンと割れた。

「いいのか？」ナポレオンは男の足元で転がるサーベルの刀身を眺めながら訊いた。

すると、男は少し笑ってから言った。「いいさ。これ、兵士の一人から分捕ったものだからね」

ああ、道理で見覚えがあるはずだよ、と、ナポレオンは心の中で合点する。

ナポレオンは、自分の椅子に腰掛けた。「すまんね、ここところ、立っているのも疲れるのだ」

すると男は恐縮したように言った。「いえいえ、構いませんよ」ナポレオンは、この15年ほどで相当体重が増えた。

もともと美食家で、あまり運動も好きではなかった。その上昼夜が逆転したような生活である。そんな生活態度で、スマートな体型を維持し続けられるわけがない。さらに皇帝に登ってから、毎日のように脂っこい料理のオンパレードである。

そんな食生活の結果が、中年に至ったナポレオンの、立派なおなかであった。

「だが」ナポレオンは、額に汗を浮かべながら訊いた。「いつぞやのように、兵士達を眠らせれば良かったのではないか？さすればこんな、強行突入など……」

ナポレオンが言うのは、エジプト遠征に出る前に、男と会ったときのことである。

あの時は、あの男が指を鳴らした瞬間に、全ての人間が眠りの世界へ引きずり込まれていった。あれは、どう考えてもあの男が指を鳴らすことで、皆を寝かせたにちがいない。あれが魔法にしろ手品にしろ、使えない手は無いはずである。

すると男は、困ったような顔を見せた。

「ま、まあ……事情があつて……」

まあいい。そう言つと、ナポレオンは椅子の前に置かれた机に両腕を寄せ、前かがみになった。そして、男を睨みつけるように眺めて、訊いた。

「で、何の用だ？」

すると男は、答えた。「ん？君の顔を見に来ただけだよ」

「はは、嘘はいけない。あなたが我輩の前に姿を現すときには、我輩に何か助言を残す、そうだろう？」

ナポレオンの発言を聞いた男は、不思議そうな顔を見せた。そして、言つた。

「なんだ？君は、助言が欲しいのかね？」

ナポレオンは、男を見据えて言つた。「我輩は、納得がいかないのだ」

「納得？何に、ですかな？」赤い服の男は訊いた。

「我輩が帝位を追われるのはしょうがない。我輩は戦に負けたのだ。それにはある程度納得できよう。だが……」

「だが？」男は、話を先に促した。

「ルイ16世の子孫が、なぜフランス王に返り咲く！？」

ナポレオンの退位に絡んで、その後継者を選出することになった。ナポレオンは自分の息子に帝位を譲りたかつたようだが、クーデターによつて成らなかつた。それに、そんなことをすれば、フランスを包囲する反ナポレオンの国々が納得すまい。

結局、ナポレオンの血統でもなく、フランスの名門、ということでは、ルイ16世の子孫が、次のフランス王に選出されたのであつた。もともとは王政を打倒する立場だつたナポレオンにとって、これは屈辱だつた。

自分達がやつとの思いで打倒した王朝の子孫が、また元首に、だと？ナポレオンの怒りは収まらない。

「ふむ……それで、どういう類の助言が欲しいのだね？」

男がこう問いかけると、ナポレオンは力を込め、答えた。

「我輩は、また、皇帝に返り咲きたい。あなたの、意見を聴きたい」

部屋中に、ナポレオンの声がビリビリと響き、窓のガラスを揺らした。

その空気の振動は、赤い服の男にも、ビリビリと響いた。男は、笑った。

「何が可笑しい」

ナポレオンが咎めるように訊くと、男は言った。

「いや、やはり、あなたは変わっておりませんな。あなたは、あのコルシカの山で出会った頃と変わらない」

「それは、侮辱か？」ナポレオンの言葉は、ビリビリという振動を作る。まるで、彼の中で渦巻く感情を代弁するように。

すると、男は取り繕うように頭を下げた。「気分を悪くされたのならば、謝ります」まるで、舞踏のような立ち居振る舞いだったが、ナポレオンはごまかされない。

「今の発言は、侮辱か？と訊いているのだ」

ナポレオンの両腕が、フルフルと震えている。ふと赤い服の男がその手を見ると、がっちり拳骨を固めている。まるで、心から漏れ出す狂気に、必死に抗うかのように。それに気づいた赤い服の男は、取り繕うのを止めた。

男は、こう言った。

「侮辱、でしような」芝居がかった声だった。

「……キサマ」ナポレオンは、両手を机についた。立ち上がろうとしているのだ。だが、それを、男が手で制すと、ナポレオンはそれに従った。

「君は」男は、手を下げずに続けた。「子供の頃と、全く変わっていない。子供の頃、私に言ったな？『王が嫌い』だと。それはまさに、今の君の姿だ。」

だが、最近まで君は、まさにその王だったのだろうか？不思議な話じゃないか。なぜ、君はそんなに嫌う「王」になったのだ？そして、

なぜ「王」位に固執するのだ？」

おかしい話だ。

そもそも、ナポレオンは元々は王政を否定する立場だったし、思想的にも王政を否定していた。だが、そんなナポレオンはあれよあれよの間に帝王の階段を上り続けてしまった。そして今、その階段から転げ落ちてもおなほ、また頂点に帰りたい、と言うのである。確かに、ナポレオンの人生は矛盾に溢れている。

だが、ナポレオンにはそんな疑問は浮かばないようだ。ナポレオンは、男を見据え、赤い服の男の質問に答えた。

「我輩はな」悪びれもせず言った。「権力に酔ったのだ」

「ほう、権力」男が合槌を打つか打たぬかの間に、ナポレオンは続けた。

「我輩は、エジプト遠征前に君と出会ったあと、政治の道に進んだ。政治の道に進んでから気づいたんだがね、軍人だった我輩にとって、政治、というものの力には空恐ろしいものを感じたよ。一騎当千の騎士だって、政治には勝てない。なぜなら、政治は、その騎士に罪を与え、その罪に対し罰を与えるだけで勝てるからだ。

それに気づいたのは、我輩がエジプトで負けたときのことだ。

我輩は敵前にも関わらず、同胞を残し本国へ逃げた。このとき、我輩には「敵前逃亡」の罪がかかっていた。いや、正しくは、「権力」という騎士が、我輩の首元に刃を当てていた。だが、我輩はクーデターを起こし、それを辛くも防いだ。その時にな、気づいたのだ。政治権力というものは、とてつもなく強いものだとな。政治権力というものは、ナポレオンという、『フランス救国の将軍』をも殺しうる力を持ちうるものだということに気づいたので」

「それで？」男は話を先に促した。

「我輩はな」ナポレオン、後に、「コルシカの悪魔」と呼ばれることになる男は、満面の笑みで続けた。

「ヨーロッパに、我輩を頂点とする権力を作らんとした。なあ、想像するだに楽しくないか？我輩の指図一つで動く、巨大帝国だ。

そして、我輩は、世界一の力を持つ人間となる。想像するだに楽しくないかね」

赤い服の男は、ふと、コルシカ・アジャクシオの、あの高台を思い出した。そして、得心した。

なるほど、この男は……。男は思った。やはり、子供の頃から変わっていなかったのだな。

少年ナポレオンは、高台からアジャクシオを眺め、「自らがその支配者なんだ」という空想を楽しむ少年だった。今のナポレオンもそうなのだ。ヨーロッパの真ん中に「権力」という高台を築いて、そして、「ヨーロッパ」というアジャクシオの街を見下ろしたいのだ。

そう。ナポレオンを今まで突き動かしていたものは二つあったのだ。

一つは、「啓蒙思想」という、フランス革命前夜の「熱病」。そして、もう一つは、「権力志向」という、まるで生きとし生けるものが必ず何かを食べねばならないかのような、「本能」だった。

ナポレオンは、続けた。

「我輩は、もう一度作りたいのだ。我輩を頂点とする、頂を。帝王たる我輩に、策を超越せ、赤い服の男よ」

美しい。思わず、赤い服の男は思った。

ナポレオンの姿は、好意的に見ても、貴族服をまとった豚程度のものだった。

だが、美しい、と、男はナポレオンを心の中で評した。

これほどに、「自分」を疑わず、生きている人間を見たことがあったろうか、と、男は心の中で嘆息した。

人間というのは弱い生き物である。だから、自分が間違っていることを恐れるし、人の評価を気にする生き物である。結果、良くも悪くも普通という枠に収まってしまふことが多い。

だが、今、赤い服の男の目の前にいるナポレオン。ボナパルトという男は、その手の後ろめたさのようなものがまるでない。「我輩

こそが正義」と叫んでいるようですらある。まさに、「美しい」のである。

だが………。

男は少し考えながらも、すぐにその考えを引っ込めた。

そして、ナポレオンの質問に答えた。

「………ならば、とりあえずエルバ島で隠居なさるといい」

「なに？」ナポレオンの顔が歪んだ。それに気づきつつも、赤い服の男は見ぬフリをして続けた。

「今のうちは、自重なされ。なぜなら、今はヨーロッパ中が、あなたのことを覚えていいるからだ。そして、あなたがまた戻ってくることを恐れているからだ。だが、どんな人間も、追憶の中に消えてしまう。たとえ、一時はヨーロッパのほぼ全てを手中にした男の記憶でさえ………。そして、ヨーロッパ中があなたを忘れたところに」

「打って出ればいいわけか」ナポレオンは、赤い服の男の言葉を遮って、答えを言った。

「まあ、そういうことですな」赤い服の男は、そう言って頭を下げた。

すると、ナポレオンは重そうな体を動かし、椅子から立ち上がった。

そして、重い足取りで部屋の中を歩く。窓の景色を一瞥すると、さつき赤い服の男によって倒された兵士達が、ちらほら目を覚まし、まだ目の覚めない兵士達の気付けをしている。「………そ

うだ、赤い服の。あなたに、お礼をせねばな」

そう言って、ナポレオンは壁に立てかけていた剣を取った。

すると男は、呆れたような顔をして、言った。

「ああ、私を殺そうというのだね？コルシカの田舎者の分際で」

「だまれ！！」

コルシカの田舎者、と揶揄されたナポレオンは、噴き出る怒りと

一緒に、鞘から細身に剣を抜き払った。シャラン、という鞘走りの音が部屋中に響き、白刃があらわになった。その鏡のように研ぎ澄まされた白刃には、ナポレオンの「美しい」顔が映りこんでいた。

ナポレオンの手にある白刃は、一瞬間を踊り、赤い服の男の首筋に突きつけられた。

「今の内に、神にでも祈るのだな。……ま、もつとも」ナポレオンは、陰湿な笑みを浮かべた。「我輩は皇帝。皇帝とは、神にさえ認められた王のこと。皇帝を侮辱した輩の祈りを、神が聞き届けるとは思わんがね」

ヨーロッパにおいて、教会と政治機構は不可侵の関係を結んでいた。要は、王は世俗の代表であり、教会は神の代弁者だったのだ。だが、その二つの権力を持つ存在、それが「皇帝」という位なのである。

ナポレオンが言ったことは、そういうことだ。

男は、そんなナポレオンの言い分を鼻で笑った。

「ふん……。神の加護を失い、民の支持をも失った皇帝は、『ただの人』ではないのかね？」

「これ以上の侮辱は」ナポレオンの構える剣先が、わずかに震えた。「許さんぞ、赤い服の男よ」

「まあ、侮辱に耐えよ、ナポレオン殿。それが、私の助言だ」

まったく首筋に突きつけられた剣先に怯えた様子を見せない男に、ナポレオンは少々不気味な思いを感じ始めた。ナポレオンは、剣の柄を握る手の力を、一層強くした。

「最後に、訊いてよいかな、あなたが死ぬ前に」と、ナポレオンは、男を睨みながら言った。

「どうぞ」赤い服の男は、何の感慨も無さそうに話を先に促した。「我輩が訊きたいのは一つ」ナポレオンは、訊いた。「あの時、あなたは我輩に何をした？」

あの時。

子供の砌^{みきじ}。ナポレオンが、初めて赤い服の男に出会ったとき。赤い服の男は金色の鍵をナポレオンに差し込んだ。今思えば、あれからナポレオンの人生は変わったのだ。コルシカの地主の三男坊が、天才軍略家になつたのだ。ナポレオンが、赤い服の男に訊きたいことは、もはやこれだけだつた。

だが、赤い服の男は首を横に振つた。

「それは言えない。いや、正確には」男はナポレオンの顔を見据えた。「言わない」

「……死にたいのか」ナポレオンは、男の首から剣先を少し離れた。首を刎ねる、「助走」をつけるためだ。

すると男は、ナポレオンの想像したことは全く違うことをしゃべり始めた。「ああ、死にたいね」

「何だと？」ナポレオンが思わず訊くと、男は続けた。

「いつぞや話したと思うが、私はね、死ねないのだよ。一遍でいいから、死にたいなあ。あの世には、たくさん知り合いがいるものでね。カサノヴァ、元気かな？また、あの世でも女の尻を追い掛け回しているのだろうか……？ああ、あと、私を重用してくださった大王、ルイ15世閣下。英明君主ながら妻君に恵まれなかった、ルイ十六世閣下。そして、私を殺そうとした、わがまま王妃、マリーアントワネット。そして……」

「だまれ！」ナポレオンの一喝が、剣尖とともに、赤い服の男に浴びせられた。

ナポレオンの細身の剣の剣先が、赤い服の男の首を捉えた。そして、まるでパンを切り離すかのように容易く、しかも音もなく、赤い服の男の首は飛んだ。

男の首は、一瞬間を舞つたが、すぐにグシャッと音を立て、地面に落ちた。

そして、さつきまで頭がついていた胴体は、己の首からあふれ出す血によって作られた赤い海に、どしゃりと崩れ落ちた。

るだろうに」

ナポレオンは、不思議そうに呟いた。ナポレオンは気づいていないのだ。あの兵士が恐れていたものが何であったかを。

部屋で一人ナポレオンは自分の剣を目の前にかざした。

レイピアほどではないにせよ、華奢な剣身。その剣先に、赤い赤い血が、べつとりとついている。血のついていない剣身には、血の気が失せ、真つ青になっている自身の顔が映りこんでいた。

我輩の剣の腕も、捨てたものではないな。ナポレオンは、剣先を懐のハンカチーフで拭くと、鞘に収めた。

だが……。まさかあれしきで死ぬとはな。

ナポレオンは正直、あの一閃で首が飛ぶとは思っていなかった。せいぜい首の皮が切れる程度に斬りつけ、赤い服の男を脅すつもりだったのだ。それに、こんな華奢な剣では、首は刎ねられまいし、自分にもそんな剣腕はない、という諦めのようなものもあった。

だが、まるでギロチンにでも嵌められたかのように、かの男の首は容易く飛んだ。それこそ、ケーキでも切るような感触だった。

案外、そんなものなのかもな。

今まで一度も人を斬ったことの無かったナポレオンは、「人間は案外もろいものなのだ」と考えることにした。

ナポレオンは、剣を拭いて血に染まったハンカチーフを、まるで赤い服の男への手向けのように、血の海に投げ捨てた。ひらひらとまるで蝶のようにハンカチーフは宙を舞ったが、やがて血の海に飛び込んだ。血の海に波紋を立てて落ちたハンカチーフは、一瞬浮かんだようにも見えたが、すぐに血を吸って、赤い海の中に消えていった。まるで、死の淵に沈む、亡者のように。

当然のことだが、これが、ナポレオンと赤い服の男との、最後の会談であった。

.....

気づくと、ナポレオンは安楽椅子の上にいた。

む、おかしいな。ナポレオンはふと周りを見渡す。確か今、我輩は赤い服の男を切り殺したのではなかったか？なぜ我輩は安楽椅子で眠っているのだ？

そう思ったナポレオンは、ふと周りを見渡し、まどろんでいる目をこすった。だが、ナポレオンの目に映ったのは、あの赤い服の男を斬り殺した小宮殿ではなく、どこことなく小汚い、あの小宮殿と比してさえ見劣りのする建物の中であつた。それでも事情が飲み込めず、ナポレオンは窓の外を眺めた。窓の外には、ヨーロッパには無い植物たちが、ギラギラ輝く太陽に照らされていた。

ああ。なるほど。さっきまでの夢だつたのか。ナポレオンはようやく得心した。

ナポレオンは、未だに眠気に支配されている頭をゴンゴンと小突いた。

ここはセント＝ヘレナ島。我輩は、安楽椅子に座つたまま、うたた寝をしてしまったのだ。そして、在りし日の夢を見ていたのだ。

ナポレオンは、窓をまた眺めた。ナポレオンが逃げ出さないように建物を見張る、兵士たちの姿が見える。その兵士達は、顔を赤くしながら、まるでこの暑さがナポレオンのせいだとも言いたげにナポレオンのいる建物を睨んでいる。

あのあと。ナポレオンは夢の続き、すなわちエルバ島に渡つてからの自身の人生を省みて、ため息を吐いた。

その後、ナポレオンは領主として、エルバ島に配された。つまりこれは、「最低限の食い扶持と榮譽は与え、今までの所業には目を

瞑るから、ここで余生を過ごしてくれ」という、かつての皇帝に対してヨーロッパの人々が見せた「礼節」であった。そんなヨーロッパ中の願いを理解しつつも、ナポレオンは赤い服の男の助言を愚直なまでに守った。つまり、「自分はもう皇帝に返り咲くつもりはない」と言わんばかりに、エルバ島の小領主として隠棲してみせたのだ。

最初の頃は、ヨーロッパ中が、ナポレオンの影に怯えた。いつかあの、「コルシカの悪魔」が戻ってくるのではないか、そしてまた、まるでかの黒死病のように、戦という災厄・死を運んでくるのではないか……。

だが、ナポレオンは動かなかった。

そのうち、ヨーロッパの人々は、「コルシカの悪魔」を忘却のあなたに追いやった。それはまさに、天災と同じことである。天災も、被害のあつた直後には生々しく語られ、皆それに備える。だが、そのうち、天災への恐怖が日々の生活に洗い流され、人々の意識から消え去ってしまう。かつては「黒死病」と比肩されるほどに語られた「コルシカの悪魔」もまた、追憶のかなたに姿を消した。

だが、忘れたところにやって来るのが天災であるように、「コルシカの悪魔」もまた、忘れた頃に牙を剥いたのである。いや、正確には、「皆が忘れた頃を見計らって、牙を剥いた」という方が正しいだろう。

ナポレオンは、皆の記憶から「コルシカの悪魔」が消えたことを肌で感じるようになると、行動を開始した。ナポレオンは、「エルバ島の隠居」という仮衣を脱ぎ捨て、その本性をむき出しにしたのである。

ナポレオンは、本国の親ナポレオン派の者たちと共に、クーデターを起こした。

それはまるで、電光石火の如き行動だった。

ナポレオンはエルバ島を脱出し、パリに達した。そして、自らの軍事力をちらつかせ、当時のフランス王で、失政の目立っていたル

イ18世を退位に追い込んだ。そして、自らはフランス皇帝として復位したのである。

だが、そんな行動を、ヨーロッパ中が許すはずも無かった。

ヨーロッパ各国は、またもやフランスへの、いや、「コルシカの悪魔」への包囲体勢を完成させた。そのような情勢下では、ナポレオンはまたもや勝ち目の無い戦に出陣するしかなかった。

1815年、ワテルローの戦い。

この戦いで、ナポレオン率いるフランス軍は、イギリス・プロイセン連合軍に大敗した。結局、この戦争における敗北によって、ナポレオンはまた登りつめた皇帝位から転がり落ちることになった。

そして、ナポレオンは退位に追い込まれ、宿敵イギリスによってセント・ヘレナ島に流されることとなった。エルバ島のときのそれとは違い、その扱いはもはや「戦犯」としての扱いだったのだ。

この約100日間のことを、「ナポレオンの百日天下」と呼ぶが、当のナポレオンは知る由もない。なぜなら、その名が付けられたのは、ナポレオンが歴史上の人物になってからだからである。

結局。ナポレオンは口の奥でぼやくように言った。

我輩の人生はなんだっただろう。

コルシカの地主の子として生まれ、長じて軍人になり、気づけば皇帝にまで登りつめた。だが、何度も投獄された。何度も暗殺されかかった。二度も帝位から転落した。天国も見た気がするが、それ以上に地獄も辛酸も味わった。そして最後は結局、勝ち逃げできず、負け越してしまった。

そして、ナポレオンに残ったのは、ヨーロッパ中を戦火に巻き込んだ死神、「徳を得られず、権力を掴んだ男（ゲーテ評）」、「コルシカの悪魔」という悪名だけだった。そして、老境に至ったナポレオンには、その悪名はあまりに重たくその肩に押し掛かった。

「我輩は……」ナポレオンの皺だらけの顔に、一筋の涙が流れた。「もはやただの咎人なのだ」

ナポレオンはまた目を閉じた。

もう、眠ってやり過ぎしてしまおう。ナポレオンは、心の中でつぶやいた。我輩は我が咎を、すなわち、多くの人間の命を、まるで黒死病の如くに刈り取っていった罪を受け止められない。

ナポレオンは、気づいてしまった。上に登るとき、すなわち権力の頂点を極めようとしたときに、どれだけ多くの人間を踏みつけにし、どれだけ多くの人間の家族を無残に奪い、どれだけの屍の山を築いたかを。

かつて皇帝という頂に向かって登っていたナポレオンは、世界と対峙する人間だった。のちにある独裁者が言うように、「あまりに多数の死は、ただの数字の羅列でしかない」と冷やかに考えることができたのだ。だが、今のナポレオンは、もはやただの人だった。「ただの数字の羅列」と思えなくなった。そういうことだ。

ナポレオンは、呼吸を整えた。自分勝手にも、寝ようというのだが、彼の眠りは、ある声に遮られた。

「やあ。ナポレオン。ボナパルト元・皇帝陛下？」

懐かしい声だった。どこか優しく、どこか棘のある声。もはや老境に至ったナポレオンとは違い、若々しい声。

ま、まさか、あの男が……？まさか、あの男はあの時我輩が……。

ナポレオンは、まるで悪夢から覚めるように、ぱちつと目を見開いた。

ナポレオンの目の前には、懐かしい男の、もはやすでに死んでいくはずの男の、あの頃と変わらない姿があった。

思わず、ナポレオンは目をこすった。事実、夢なのかとも思った。

赤いフロッグコートに白タイツ、そして刺繍入りの靴。かの頃の格好と違ったのは、かつらを着けていないことだ。彼の自毛は、キラキラと輝く白色、あえて言い表すとすれば、銀髪とも言えるものだった。彼は、肩くらいまである長い銀髪を、後ろに垂らしている。

間違いない。この男は……。ナポレオンは思った。あの、赤い服の男だ。

「ふふ、我輩が手にかけてあなたが迎えとは、皮肉なものだ。それとも、我輩は、もう死んだのかな？」

ナポレオンがそうつぶやくと、男は言った。

「いえいえ、私はあの世からのお迎えではありませんし、ここがあの世というわけでもありませんよ、陛下」

かつてと変わらない物腰。それこそが、今日の前にいる男が、赤い服の男である証拠だ。ナポレオンは、驚愕の顔を覗かせた。

「バカな?! あなたは、間違はなく死んだはず。いや、我輩が確かにこの手で……」

「殺したはず、と?」

「……なぜ、生きています?」ナポレオンは、相変わらず不敵な態度を取る赤い服の男に問いかけた。すると男は指を一本立ててその質問に答えた。

「確か、いつぞや話したと思うが」男は、泳がせていた目をナポレオンに向けた。「私は、死なない。たとえ、首を刎ねられても。如何な権力でさえも、私に死を賜うことは出来ないのだ。ま、もつとも」

男は、コホンと咳払いしてから続けた。

「もし、この世界に『神』なるものがいたとして、その者が私に死を賜うのなら話は別だが、ね」

にわかには信じられない話だ。首を刎ねられても生きている人間など、いようはずも無い。だが、実際にいる以上、信じるしかないのだろう。なにせ、ナポレオンの前にいるのは、あの、「赤い服の男」なのだから。

ナポレオンは、そんな赤い服の男に訊いた。

「一体我輩に何用だ？ 一体なぜ我輩の元に来た？ お迎えでないとするなら、あなたが我輩に用があるとは思えないがな」

ナポレオンの疑念はもつともである。もはや死期の近いかつて皇帝だった男を、ヨーロッパからはるかに離れた孤島に訪ねるなど、そんな物好きでもしない。もしそんなことをする者がいるとするなら、それはその「皇帝だった男」によつほどの価値があるか、あるいは訪ねる側が稀代の物好きかのどちらかだろう。

しかも、この男の場合、一度ナポレオンに「殺されている」のである。そんなヤツが、わざわざ訪ねて来ようはずが無いのだ。訪ねてくるとすれば、それは……。ナポレオンは少し、己の来し方に思いを致したが、まあいいか、と半ば諦めかけているナポレオンなのだった。

だが男は、そんなナポレオンを笑うかのようにカラカラと笑って、言った。

「ん？ 何、バカンス、バカンス。赤道直下のこの島は、なかなかバカンスにはいいものでね。それに」

男は、不意に真面目な顔をして続けた。

「君の質問に答えに来た。それに、君に用があるのだ」

え？ ナポレオンは首を捻った。我輩は、何かこの男に質問をしておったのか？ と。そんな、「？」が顔に書いてあるようなナポレオンの顔を認めてから、男は続けた。

「ほら、私を『殺した』とき、君は私に質問したではないか。『

子供の頃、我輩に何をした』とな。その質問に答えに来たのだよ」

ああ、あの質問か。ナポレオンは、かつて自分が訊いた質問を思い出して、苦笑いした。

「何を施したのだ？」

ナポレオンがかつてした質問をオウム返しすると、男は、かつてのようにフロッグコートから金色の鍵を取り出した。以前と同じく、貴族服をまとった男の持ち物の割にはまるで装飾が無く、ただ金色なだけのものだった。

だが……。ナポレオンは初めて見た時とはまた違う感想を持ちつつあった。

これは、いいものだ。

ナポレオンが赤い服の男の持つ鍵を初めて見たのは子供の砌だったから、当時はものの良し悪しを見る力はまるで無かった。だが、現在なら、その力は備わっている。なぜなら、ナポレオンは人生の色々な場面で、様々な「最高級品」と出会ってきたからである。それはもちろん、皇帝にまで登りつめた男が唯一持ちえた、一種の役得のようなものだ。

その「ものの良し悪しを図ることが出来る」老人ナポレオンはさらに思った。

これは、果たして人間の持つていいものなのか、と。

ナポレオンは皇帝の頃、「これで国一国は買える」とまで言われた王冠を見て触ったことがある。その王冠は、ダイヤモンドやルビー、ラピスがふんだんに盛られている、大変に美しいものであった。

だが。ナポレオンはその王冠を頭の中で思い浮かべつつも、思った。

あの王冠で国一つ買えるのならば。あの鍵は世界を買ってもなおオマケがくるのではないか、と。

まったく美しくも無く、なんの来歴も無さそうな鍵であったが、目の利くナポレオンをしてそう思わせるだけの『力』が、男の鍵に

はあつたのだ。

ナポレオンは、そんな鍵を、まるで何か神々しいものを見るような目で見つめ続けた。すると、男は笑って言った。

「へえ、君にもわかるようだね。この鍵の価値が」

ナポレオンは答えた。

「いや、どういった意味合いで価値あるものかは見当もつかない。だが、価値のあるものだ、ということくらいはわかる」ナポレオンは、まるで鍵の放つ光に目がくらんだかのようにまたたきをしてから続けた。「これは、世界すら買える。もし、我輩が世界の支配者だったとしたら、これをあなたから買い受けるだろうね」

すると、赤い服の男はニコッと笑った。

「ええ。確かに。この鍵には世界を買えるほどの、いや、それ以上の価値があるものだろうね。だがね」赤い服の男は、長い銀髪をかきあげてから言った。「これは、あなたには使いこなせないはずだね。いや、絶対に使いこなせない」

「ふ、言いよる」ナポレオンは苦笑いした。もはやかつてのように、我が身にかかった侮辱に食って掛かるほどにナポレオンは若くなかったし、破格の人間ではなくなっていた。それがため、結局普通の老人が若い者に馬鹿にされたときのような反応しか出来なくなっていた。

そんなナポレオンに気づいたのか、赤い服の男は言い訳をした。

「あ、いえいえ。あなただから出来ない、と言っているわけではまったくない。逆のことを言うのなら、世界中を歩き回っても、私しかこの鍵を使いこなせる人間には出会えないだろうからね」

そう言い訳する男を見て、ナポレオンは苦笑いの程を深くした。

「それは結局、我輩には使えない、つまりは我輩にとっては無用の長物、ということではないか」

すると、男は声を出して笑った。

「それは、その通りなのですがね」

ナポレオンも、痛む胃を気遣いながらも、笑った。笑いが収まる

と、ナポレオンは訊いた。

「で、その鍵は何に使うのだ？正確には、その鍵で、我輩に何を
した？」

「その質問に答えるには」と、男はそう前置きして答えた。「ま
ずやらなくてはならないことがあるんだ」

「そうか、では、早くしてくれんか」ナポレオンは、また苦笑い
を浮かべてから続けた。「で、なくば、質問の答えを聞くより先に、
我輩の魂が死神に持っていかれてしまうものでな」

「はは、違くない」赤い服の男は、そう言ってカラカラと笑うと、
右手に持つ鍵を握った。

赤い服の男は、まるでレイピアを敵に刺すかのような仕草で、鍵を構え、ナポレオンにゆっくりと突き出した。

「な、何を……」ナポレオンが恐れのもつた声で訊くと、男は言った。

「以前も経験あるでしょう？大丈夫です。あなたを殺したりはしませんよ」

ナポレオンは嗤った。はは、そうだった。今の我輩を殺しても、何の利益もあるまいに。それに、わざわざ殺すまでもなく、我輩はそのうち死ぬ。絞首刑に架かっている人間の心臓に、ナイフを刺す必要などない。ナポレオンは、ふとそんなことを思った。

赤い服の男は、鍵を以前のようにナポレオンの左胸に差し込んだ。以前のように、全く痛みもなければ異物感もない。やはり、普通の鍵ではない。

男は、以前とは逆回しに鍵を回した。また以前のように、「カチツ」と金属同士がぶつかるような音が響いたことを確認すると、赤い服の男は鍵を引き抜き、その鍵をフロッグコートの奥にしまった。

「不思議な鍵だな。その鍵は……、ん!？」

ナポレオンはそう言いかけて、自らの体の変調に気づいた。

体が重い。痛い。しんどい。な、なんだ、これは……。

ナポレオンは、肩で息をし始めながらも、男に訊いた。

「その鍵で、毒でも盛ったのか？それは本当は毒針か何かで、やはり我輩を……」

男は、頭を横に振ってから答えた。

「いいえ。毒など盛ってはいませんよ。そもそも、あなたは我が手を汚さなくともすぐに死ぬのだから、手を下す必要もないでしょ

う？」

「ならば」ナポレオンは、肩で息をしながらも訊いた。「この体の変調はなんなのだ？！体が重い！痛い！目も霞む！これは一体・・・」

すると、赤い服の男は答えた。

「これが、本来の、あなたの体調なのでしょう」

「な、なんだと？」ナポレオンは怪訝な顔をした。

「あなたは今まで胃をわずらっていた。その上、毎日ご馳走を食べ、酒を飲み、しかも運動しない・・・。そんな生活を繰り返していた結果、君の体はスタボロになっていたのだ」

ナポレオンは、脂っこい料理が好きだった、という。その脂っこい料理をワインで流し込む、というのがナポレオンの食膳の光景だった。しかも、皇帝になってからは特に、机の上での仕事が増えた上に暗殺を恐れ、あまり外出をしなくなった。もし、現代の医者がナポレオンを診察したなら、「生活習慣病」「メタボリックシンドローム」と診断したことであろう。

「それに」赤い服の男は続けた。「どうやら、あなたは毒を盛られているようですな。しかも、毎日微量に・・・。多分、20年以上のスパンで盛られていたのでは？」

赤い服の男が言うことは、正しかった。

現代の調査によると、ナポレオンは毒薬である砒素の中毒になっていたという。当時の建材あるいは顔料に含まれる砒素による中毒ではないか？という説もあるが、一方で毒殺説も囁かれている。大事なことは、事故にせよ故意のものにせよ、ナポレオンは砒素中毒状態であった、ということだ。

無論、毒薬の影響下にある人間が、ピンピンと元気なはずはないのだ。今まで影響が出なかったのが不思議なくらいなのだ。

ナポレオンは、またも嗤った。

「20年以上前・・・皇帝だったころから、だな。我輩は、そんなに恨みを買っていたのか」

砒素中毒による変調を、なんとか受け止めながら、ナポレオンはすこし哀しそうな目をした。そんなナポレオンの顔を眺めながらも、赤い服の男は知らん振りして言った。

「はは、それはそうでしょう。我が身の栄達のために、ヨーロッパ中に死を振りまいた人間が、誰からも恨みを買わないとは到底思えませんか？」

「そうだな」ナポレオンは、空ろに頷くと、男に言った。

「なあ、赤い服の。頼みがあるのだが」

「なんです？可能な範囲で叶えましょう」

「外で、話したいのだが」ナポレオンは、陽光厳しい窓の外を眺めた。すると、男は意外そうな顔をして、訊いた。

「なぜです？」

ナポレオンは答えた。

「決まっているだろう。死ぬときくらい」ナポレオンは暗い部屋を見渡した。「太陽に照らされて死にたいものだ」

今までの人生を見返すと、ナポレオンはあまり日の光を浴びていない。軍人時代はまだしも、権力の中枢にいた時期が長いせいだ。

男は、恭しく頷いた。そして、ナポレオンの提案に賛成した。

「そうですね。そういえば、初めて君に出会ったときは、コルシカの太陽の下だったのに、それ以後は部屋の奥でしか会っていませんからね」

「だが……」ナポレオンは首を横に振った。「そういえば、我輩は事実上虜にされているも同然だったな」

ナポレオンは、セント＝ヘレナ島の提督・ハドソン＝ロウの顔や、さつきからこの建物を取り囲む兵士の顔を思い浮かべてため息を吐いた。だが、赤い服の男はまるで問題がないとばかりに満面の笑みを見せた。

「お任せを」そう言うと、赤い服の男は懐からあの鍵を取り出した。そして、またもやナポレオンの胸に刺し、ぐるっと回すと、指をパチンと鳴らした。すると、また鍵を回し、ナポレオンの胸から

引き抜き、自らの懐にしまった。

「眠らせたのか？」ナポレオンは、いつぞやの出来事を思い出して訊いた。

「ええ」男は頷いた。「けれど、以前のように建物内の人々だけなんてみみつきいことはしていない。今回は、このセント＝ヘレナ島の人々全てを眠らせた。この島で目を見開いているのは、君と私だけだ」

ナポレオンは、感嘆の顔を覗かせた。セント＝ヘレナ島は、かなり広い島である。この男は、その島全ての人間を眠らせた、と言っているのである。

「一体、これは何なのだ？この人知を超えた力……これは……？」

ナポレオンは、思わず男に訊いた。すると赤い服の男はもつたいぶるように言った。

「はは、それは、外で話しましょう。ここでその種明かしをしよう」と、『外で話したい』という君の希望が叶えられなくなるよ。なぜなら、全てが一つの根っこにつながっているからだ」

「ふふ、随分と、勿体つけるものだな、だが」ナポレオンは、諦めたように言った。「君が相手なら、それはしょうがないと言えるな。何せ君は、赤い服の男。我輩の想像の、はるか彼方に行くのだからな」

「人を怪物か何かのように言わないでくれないか？私だってただの人だよ」

「そうなのか？」ナポレオンが真顔でそう訊くと、赤い服の男は気色ばんで反論した。

「当たり前だ！私だって、死なない以外はただの人間だよ。ただ、ちよつと真実の探求が好きなのだだけ」

そんな赤い服の男の言い分を、ナポレオンは鼻でフン、と吹き飛ばした。

「バカを言え。『死なない人間』は、もはや人間ではあるまいに」

すると、男は頷いた。

「違うないね」

明るい声とは対照的に、男の顔には少し翳が差した。だがナポレオンは、そんな男のわずかな変化に気づかなかった。

セントⅡヘレナ島は、眠りの海に沈んでいた。

ナポレオンと赤い服の男が部屋から出ると、普段は不機嫌そうな顔をして執務をしているはずのハドソンⅡロウが廊下に倒れていた。執務室のドアが開け放たれていることと、トイレに続く廊下で倒れていることから鑑みて、トイレに行く途中に、眠気に襲われ、その場で崩れ落ちてしまったのだろう。ナポレオンは、ハドソンⅡロウの頭を、普段の恨みとばかりに足先で小突いた。

眠っていたのは、当然ハドソンⅡロウだけではなかった。

ナポレオンが逃げ出さないように建物を見張る兵士たちも、葡萄を栽培している農民たちも。いや、それどころか、軍用馬、農耕馬、家畜たち。みんな寝ている。そういえば、鳥のさえずりすらも聞こえんな、とナポレオンは額の汗を拭きながら思った。

ナポレオンがふと池の方に目をやると、ゆるゆると泳ぐ魚を見つけた。

「魚を眠らすことはできないのか」

ナポレオンがそうつぶやくと、赤い服の男は反論した。

「いやいや、魚は寝ていても目を閉じないし、泳ぎ続けることも出来る。だが、確かに寝ているはずだ。それが証拠に……」

赤い服の男は、白タイトのまま、池に入った。さつきまで鏡のように穏やかだった池の水面は、嵐の海のように波が立ち荒れた。そして、男は無造作に手を水の中に入れると、すぐに引き抜いた。

「この通り。魚を手づかみで捕まえることも可能だ」男の手には、池の底と同じ色をした、淡水魚が握られていた。

どのくらい歩いただろうか。ようやく、海岸に着いた。白い砂浜。そして、白い雲が躍る、蒼い空。一步踏みしめることに珊瑚のかけらがジャリ、ジャリと音を立てた。普通の人が見れば、風光明媚な

光景である。

だが、ナポレオンには不吉な感じがしてならなかった。

白く硬く、なんとなく細い、珊瑚の欠片。それは、人間の骨のようにはしかナポレオンには見えなかった。死神が通った跡は、かくの如きものなのだろうな、と、ナポレオンはなんとなく思った。

いや、むしろ。ナポレオンは頭の中で続けた。

これは、我輩が通った跡なのだ。我輩が、人の命を薙いできた、我輩の道。

「ふ、キレイだな」赤い服の男は、そんなナポレオンの気も知らず、珊瑚の白い砂浜を眺めながら言った。

「そうか？我輩には、屍骸なきがらにしか見えんが」そうナポレオンが言うのと、男は笑って言った。

「確かにこの光景は、珊瑚の屍骸しかい、すなわち、我らが忌むべき死が積み重なってできている。だが」男は、両手を広げた。まるで、この珊瑚の浜を祝福するように。「人間は、その美しさを否むことはできない。キレイなものはキレイなのだ」

「そういうものなのか」と、ナポレオンが訊くと、男は答えた。

「ああ。そしてそれは……」男はナポレオンの方を見て、言った。「人間にも当てはまることだ。たとえ、ヨーロッパ中を戦火に巻き込み、数百万の人間を地獄門に送った人間であっても、美しい人間は美しいのだ」

「我輩を、慰めようというのか」

ナポレオンのそんな質問には答えず、赤い服の男は続けた。

「ただ、人間の評価はこの珊瑚の砂浜のようにはいかない。やはり、後の人間たちは、人間の醜悪な面を見て評価しがちだ。だが、『美しい人間』は連綿たる歴史のあるポイントで……」男は空を見て、言った。「まるであの太陽のように輝くものなのだ」ナポレオンは、首をかしげた。「何を言っているのか、判らないな」

すると赤い服の男はため息を吐いた。「まあ、君はわからなくて

もいいのさ。だって今の話は、君に関係のある話ではないからね」

「つまりは」赤い服の男は言った。「今の話は、君が歴史という物語の上で果たす役割についての話だから、君自身には関係ないのさ」

歴史という物語の上には、異様なほどに、まるで、あまねく地上を照らす太陽のように、圧倒的な存在感を示す者がいる。あるものは「王の中の王」として、あるものは「偉大なる神の代弁者」として。あるいはただの地主だったものがあれよあれよのうち存在感を示すこともあるし、それどころか農民の娘が祖国の英雄になる例すらある。この現象は、政治史、軍事史に限らず、芸術の分野でも起りうる。

そういった人間は、「天才」「英雄」「大王」「破格の人」などと呼ばれる。そういう人間達は、そのあまりの影響力のために多くの人間の生き方に多大な影響を及ぼしてしまう。あるものは多くの人間の命を奪い、またあるものは多くの人間の心を動かして。

それはまさに太陽なのだ。太陽は、作物を育てもするし、地を焼きもする。ものを生かす力もあるが、ものを殺す力もある。ある場面では、太陽は多くの命を薙ぐ存在になるだろう。しかし、その太陽の美しさは何人も否定できないのである。

赤い服の男は、ナポレオンがそういう人間だと言っているのである。赤い服の男は、そういう人間を指して、「美しい人」と評しているのだ。

太陽に照らされた砂浜が、まるで赤い服の男の髪の毛の色のように、銀色に輝いた。そして、その銀色を、波打つ海が少しずつ削っていく。が、波も、その銀色全てを払うほどの力は無く、結局その二つの色がナポレオンの目前で共存していた。

そんな砂浜に二人は、人一人分置いて腰掛けた。海風が、二人の髪を揺らし、吹き抜けていく。そんな二人を見下ろす、偉大で荘厳な太陽。それを見上げて、赤い服の男は続けた。

「太陽というのは」男は続けた。「自らの行いを悔やんではならない。そして、懺悔することは許されない。そういうものなのだ。なぜなら……」

「なぜなら？」男の隣に座るナポレオンは、話を先に促した。

赤い服の男は、ナポレオンの顔を見て、言った。「太陽は、そもそも、そんなことに興味が無いからだ」

「では」ナポレオンは、赤い服の男に訊いた。「後悔してはならないのか、我輩は」

すると男は、肘顎をついて答えた。「いや。後悔しても構わないよ。ただ……」

「ただ？」ナポレオンが、まるで大人の出した々の答えを訊きたがる子供のように、話を先にせつつく。

男はナポレオンに応えた。「後悔してしまった瞬間に、太陽は失墜する。そして、ただの人になつてしまふ。それはもはや、『美しい人間』ではないね。私としては、『美しい人間』は、一生美しくあつて欲しいものだがね。……まあ、一生美しい人間など、あまりいないのだけれどね」

「そうか……」ナポレオンは、肩を落としたように呟いた。そして、思った。

我輩は……、もはや『美しい人間』ではないのだな。我輩は、『美しい人間』として遂行してしまつた数々の所業を、見事に後悔している。それはすなわち、我輩はもうただの人間だという証左なのだ……。哀しくもあり、なぜか清々しくもあるな、と、ナポレオンは自分の心境を、初めて生々しく感じ始めていた。

「で、なんだが……。そろそろ本題に入ってくれないか」
ナポレオンは切り出した。

「ん？ここまでの話も本題だったつもりなのだが？」と、言つて、
さも不服そうに口を尖らせる赤い服の男に、ナポレオンは続けた。

「我輩が訊きたいのは、そんなことではない。我輩が訊きたいのは……。」
「そこまで言いかけて、ナポレオンは少し考えた。いや、我輩が本当に訊きたかったことは、もう訊けたのではないか？
すなわち、「我輩の生は、これで良かったのか？」という問いの答えを。」

我輩は……、ナポレオンは心の中で続ける。多くの人を、自分の名の下に殺したことによく気づいた。それは、悪なのではないか？
我輩は、黒死病と同じく、災厄を運ぶだけの存在だったのではないか？
そう思い悩んでいた。

だが、赤い服の男は言った。「太陽は、後悔してはならない」と。
例えそれが、慰めの言葉だったのだとしても、あと数日を生きる力にはなる。
ナポレオンは、そう思った。

「ん？君が訊きたいことは？……ああ、そうだ。説明しなきゃならないね。
なぜ、君がそんな数奇な人生を歩んだのか。そして、この「赤い服の男は懐をまさぐつて、言った。「……鍵が、君の数奇な人生と、どういう関係にあるか」
赤い服の男は、懐から手を引き抜くと、例の鍵を示して見せた。」

「やはり……。」
ナポレオンは言った。「この鍵が、我輩の人生の、文字通り鍵なのか」

あの男はあの鍵を使い、子供のナポレオンに何かを施した。そして、それ以後からなぜか、ナポレオンの人生は少しずつ変わっていった。
コルシカの地主の三男坊で終わるはずだった男は、皇帝にま

で登りつめた。

「うん、そうだな。まずは、この鍵について、説明しなければ、ね」

そう言うと、赤い服の男は、弄ぶように軽く鍵を真上に投げた。鍵は宙でくるくる舞ったかと思うと、すぐに男の手の中に落下した。まるで、人の一生を形にしたような、そんな寂しい軌道だった。

男は、出し抜けに言った。「君は、魔法を信じるかね？」

「魔法、だと？」ナポレオンは怪訝な声を上げた。「魔法など、迷信であろう？手から火が出たり、虚空から物を取り出したり、といったものはありえない、と思っっている」

ナポレオンのこの感覚は、当時の時代の空気に浴していた者ならば当然の感覚である。ルネサンスに端を発する「科学」という学問が、やがて「魔法」という迷信を薙ぎ払っていった結果、この時代には「魔法」など、物語の上でしか、現実味のないものになった。た。

とか言いつつも、実はナポレオンは結構なオカルトファンであった。ナポレオンは未来をある程度であるのなら予見できるものとして疑わず、占いを数人侍らしておくほどであった。だが、そんな彼をしても、「魔法は迷信だ」と言わしめてしまったのである。何が言いたいかといえば、当時、知識階級に属する人間の間では、（たとえオカルト寄りの思考をする人間であれ）魔法など唾棄すべき、愚かな悪習だとされていたのである。

だが、赤い服の男はこう言い放った。

「魔法は、存在するのだよ」

「バカな？！魔法などと、そんなものが……」

ナポレオンがそう嘯み付くと、赤い服の男はカラカラと笑った。

「いや、信じなくてもいいのだが」男は真面目な顔で言った。「信じてくれないと、話を先に進めることができないのだがな？これは、前提なのだよ」

ナポレオンは少し考えた。

「……わかった、信じよう。魔法という、我々がまだ知
えていない法則が存在する。そして、その法則が、我輩の人生に何
らかの影響を及ぼしている。……と、いう理解でよろしいか
な？」

そうナポレオンが訊くと、赤い服の男はコクンと頷いてから、続
けた。

「おお、そういう理解でいい。そう、君は……」赤い服の
男は言った。「短刀直入に言って、魔法の影響下にあったのだ」

「と、いうことは」ナポレオンは、赤い服の男が持つ鍵を指して、
訊いた。「その、魔法、とやらずと、その鍵の間には何がしかの関係
がある、ということか」

男は、感心したようにナポレオンの顔をまじまじと眺め、言った。
「そう、まさにそうなのだ。君はなかなかいいカンをしている。・
……この鍵はね、人に備わっている、『魔力』を開放するため
の鍵だ」

「ま、魔力だと？」ナポレオンは思わず聞き返した。

一般的に語られる「魔力」というのは、例えば悪魔と契約したり、
あるいは長い修行を経て、ようやく手に入れるもの、というイメー
ジがナポレオンにはあった。だから、ナポレオンはいささか肩を落
とした。魔力とは我が身に備わっているもので、そんな簡単に手に
入るものなのか、と。

そんな反応を見せたナポレオンに、赤い服の男は言った。

「はは、魔力、というのはね、誰にでも備わっているものなのだ。
ただ、それはどうしたわけか封印されている。悪魔と契約したり、
修行したりするのは、元々持っていない魔力を手に入れるためのも
のではなく、自分に備わっている魔力を引き出す手続きなのだ」そ
う言つて、赤い服の男は指を一本立てて、続けた。「そう、つまり
この鍵は、人間に固有の、魔力を発現させる働きを持つものなのだ」

すると、ナポレオンは首を傾げた。

「だがな。我輩、全くその自覚がないのだが……？それに、我輩は、呪文を知らぬ。あなたのように、人を眠らせたりはできない」

赤い服の男は、あくまで穏やかに答えた。「はは、魔法、といつてもね、呪文を詠じて行なうものだけではないのだ。魔法は、ただ、念じるだけでいい。強く念じれば、力になる。それが、君が使っていた魔法」

「ど、どうということだ？」ナポレオンが訊くと、赤い服の男は答えた。

「つまりは、強く思ったことが実現する魔法。『こうなりたい』という人間の想いを、そのまま実現につなぐ力だ」

「つ、つまり」ナポレオンは、自分の人生を思い返しながら言った。「自分の願いを叶える魔法に、我輩はかかっていたわけか」

ナポレオンの夢は、確かに大体叶っていた。

青年期の夢、ルイ王朝の打倒。壮年期の夢、権力の頂点に立つこと。そして、皇帝への振り返り。

思えば、こんなに上手くいったのは不思議としか言いようがない。あの、フランス革命の嵐を切り抜け、権力への階段を登った、あの危うい道を。だが……。

「だが、おかしくないか」ナポレオンは、自分の人生の汚点を思い出しながら訊いた。「では、なぜ我輩はネルソンに負けた？なぜ、エルバ島での雌伏を経験しなければならなかった？なぜ、わずか100日足らずでこのような島に流されることになったのだ？我輩は、こんなことを望んではいなかった。なのに、なぜ！？」

そう、今の赤い服の男の言うことが正しいのなら、つまり、ナポレオンが、「なんでも願ったことが叶う」人間だったのなら、ナポレオンの人生は、まるで躓きのない、上に上るだけの人生のはずである。だが、実際には、ナポレオンの人生は浮き沈みの激しいものであった。ただ、普通の人間と違うのは、その「浮き」も「沈み」も、共にスケールの大きさが半端ではない点である。

赤い服の男は、答えた。「いっぞや、話したとは思っただが・・・」

赤い服の男は続けた。「自分の運命を変えられるのは、自分だけ。つまり君は、自分の運命を変えることが出来なかったのだ」

「どういうことだ？」ナポレオンは、穏やかな口調で訊いた。すると、男も穏やかな口調で返す。

「魔法は、万能ではないのだ」赤い服の男は石を左手で拾い上げた。「強いイメージを持たないと、願望は実を結ばないのだ。・・・つまり、君がロシア遠征で負けたのは、君がその戦争での勝利図を頭で思い描けなかったからだし、わずか100日で皇帝位を追われたのは、君が、皇帝に登ってから何を、という明確なビジョンが無かったからだ。・・・ま、もつとも」

赤い服の男は、左手にある石を海に向かって投げた。重力のくびきを受けた石は、緩く放物線運動を描いて海に消えた。「君がエジプト遠征で負けたのには、他に二つ理由があるのだがね」

「何だ、それは」ナポレオンが訊くと、男は苦笑いを見せてから、答えた。

「理由の一つは、私だ」赤い服の男は、頭を掻いた。「エジプト遠征前に会ったとき、私は君に、“負けてもいいんだ”と吹き込んだ。それが影響して、君の心の中に隙が生まれたのだ。その結果」

「我輩は、負けたのか」ナポレオンは、もはや怒りもせず、結論を言った。「負けてもいいのだ、という我輩の意思の弱さ、そのせいで、『意思を実現する魔法』が発動しなかった、ということか」

「その通り。そして、あと一つ、理由がある」

「なんだ？それは」

「ネルソンだ」赤い服の男は言った。「覚えているだろうか？」

もちろん、ナポレオンは覚えている。エジプトでの敗北の遠因を作った、イギリスの海軍提督。そして、皇帝になったナポレオンを

も苦しめた、軍略家。結局、ネルソンがイギリスの海軍提督の椅子に座っていたせいで、ナポレオンはイギリスを支配下に置くどころか、国力を削ぐことさえ出来なかった。そしてその結果が、セント・ヘレナ島での幽閉生活である。

だが、ナポレオンの心中では、もはやネルソンに対して、何の感慨も抱いていなかった。「皇帝」ナポレオンならば、彼について何がしかの感慨を抱いただろうが、今のナポレオンにとっては、何の響きも持たない名前であった。

「ネルソンが、どうしたのだ？」

ナポレオンが、興味無さそうにそう訊くと、赤い服の男は言った。

「ネルソンもな、君と同じなのだ。君と同じく……、魔法を使えたのだ」

「と、いうことは、あなたが『鍵』で、使えるようにしたのだな？」ナポレオンは、訊いた。

赤い服の男は、大きく頷いた。「その通り。私は、君に施したのと同じことを、ネルソンにも施したのだ。そして彼は、君の前に立ちただかった。つまりね、君とネルソンの戦いは、君と、ネルソンの想像力の戦いだったのだ」

なるほど。ナポレオンは思った。

我が人生の前に立ちただかった男。やはり、只者ではなかったのだ。何だが嬉しくなったナポレオンであった。

「と、いうことは」ナポレオンは訊いた。「あなたは、ネルソンに会っているのだろうか？彼は元気か？」

我輩と同じように、ネルソンが魔法を使えるというのなら、きっと赤い服の男は時折ネルソンの元を訪ねているのだろう、となんとなくナポレオンは思ったのだ。

赤い服の男は答えた。

「え？知らないのか？ネルソンはもう死んだよ」少し寂しそうな目をして、赤い服の男は続けた。「トラファルガー海戦で死んだよ」

トラファルガー海戦、とは、1805年、フランス・スペイン艦隊とイギリス艦隊との海戦である。簡単に言えば、ヨーロッパ中の制海権を握っているイギリスの力を削ぐために、ナポレオンが仕掛けた戦争である。だが、ここでも、フランスは負けた。

赤い服の男は続けた。「あの海戦で、ネルソンはイギリスの指揮官だった。そして、フランス海軍を壊滅させた。だが、果断さが仇になったようだ。彼は、狙撃されて死んだよ」

ネルソンはトラファルガー海戦で、後にネルソン・タッチと呼ばれる作戦を採った。これは、敵艦の陣形を崩すために、敵陣に向かって縦列で突っ込む、というものであった。海戦において、陣形を崩すということは非常に効果的な戦略である。なぜなら、海上で、船という巨大な物で編成された陣形を立て直すのは並大抵なことではないからだ。それだからこそ、ネルソンはこの作戦を採ったのだろうが、何しろ果断だった。敵の陣に突っ込む、ということは、裏を返せば敵の攻撃をモロに受けてしまうことをも意味する。

イギリス艦は、フランス艦側の必死の銃撃を受け、ネルソンはその銃撃に運悪く当たってしまったのだった。

「そうか。ネルソンは、あの戦で死んだのか」

ナポレオンは、何の思い入れもない戦いで死んだ好敵手を思い、ため息を吐いた。

今でこそ「トラファルガー海戦」といえば、ナポレオンの没落の転機とされることも多いのだが、当時はそんな認識は無かった。ナポレオンとしては、せいぜい「イギリスの制海権を奪えなかったか」程度の認識であった。それに、ナポレオン自身はこの海戦には参戦していなかったことも、ナポレオンの記憶から「トラファルガー海戦」が抜け落ちる理由の一つであった。

「だが、わからないな」ナポレオンは海を見ながら、首をかしげた。「なぜネルソンや我輩に、あなたは魔法を授けたのだ?・・・・我輩は最初、こう考えていた。あなたは、祖国フランスを守りた

かったのではないか、と。それがため、我輩に力を貸していたのではないか、とな。だが、それは違うようだ。ネルソンにも力を貸していた、ということは、フランスを守る、という目的で動いていたわけではないようだな」

赤い服の男は、フランスのロココ様式の貴族服をまとっている。多分、フランス宮廷で活躍していた男なのだろう。だからこそ、ナポレオンはそう推測したのだ。「救国の志をもった殊勝な貴族が、フランスの代表たる我輩に、魔法という不可思議な力で以って、力を貸しているのではないか」と。だが、その推測は間違いだった。フランスを救いたい男が、その敵であるイギリスの軍人にも力を貸すはずなのだ。

すると赤い服の男は笑った。そして、言った。「悪いがな、私は君達ほど国というものに価値を感じてはいないし、愛着も抱いていない。確かに、長く過ごした国がなくなってしまうたり、あるいはたくさん友人がいる国がなくなったりするのは気分のいいものではないがね。私が少しなりとも愛着を持っていた国は……最早滅びてしまったよ。いや……正確には、君達が滅ぼした」赤い服の男は、厳しい顔をして続けた。

「私は、ルイ王朝はいい政権だったと思うよ。特に、ルイ16世閣下は、王政を穏健な方へ変えようとなさっておられた。なのに、君達は……『啓蒙思想』とかいう病に取りつかれ、暴走したのだ」

なるほど。ようやくナポレオンは気づいた。

今日の前にいる男が、「国」と呼ぶのは、ルイ王朝なのだ。そして、ルイ王朝を滅ぼした我らを……恨んでいる？ナポレオンは、そう赤い服の男の心中を慮おももんばかったが、赤い服の男から出た言葉は意外なものだった。

「恨んではないよ、別に」

赤い服の男は続けた。

「しょうがないのさ。国はいつか滅ぶ。そんなことは判っている。……ただ、私が『国』と、曲がりなりに愛着を込めて呼べるものは、もう消えてしまった、ということだ」

「意味が判らないな」ナポレオンは、そう呟いた。

ナポレオンにとって『国』というのは、地図の上に引かれた国境によって形作られた地域のことなのだ。

赤い服の男は、続けた。

「私にとつては、『国』とは人なのだ。私はな、ルイ王朝の末期の、あの時代の人間達に、愛着があるのだ」

赤い服の男にとつて、『国』とは人間の集まりなのだろう。だから、時代が移り変わり、自分に好ましい人間がいなくなってしまうた国は、もはや愛した国では無くなるのだろう。ナポレオンのような考え方の人間にとつて、赤い服の男の言い分はわかるまい。

「さて、話がずれたな」ナポレオンは、赤い服の男の方に向けた。「では、なぜ我輩と、ネルソンに魔法を施したのだ？しかも、思いが実現する、などという強い魔法を……」

赤い服の男は立ち上がり、砂浜を歩いた。累々と重なる白骨のような珊瑚のかけらが、ミシミシと音を立てて割れる。そして、いつの間にか傾きかけている太陽に目を遣つて、答えた。

「ん、そうだな……。簡単に言えば、実験だな」

「実験？」ナポレオンが訊くと、赤い服の男は頷いて続けた。

「そう、実験」

「つまり」ナポレオンは、赤い服の男に右手にある、鍵を指した。「その鍵の力を見よう、という実験、か？」

「ご名答」赤い服の男は続けた。「私はな、ルイ15世閣下の時

代、外交官としての仕事の傍ら、錬金術の研究にも手を出していた。そんな私の元に、ある日、この鍵がひよいと転がり込んできた」

ナポレオンは訊いた。「転がり込んできた、だと？そんな“人間の魔力を解放する”などという大それたものが、か？」

「それが人生判らないところさ」赤い服の男は続けた。「私は最初、この鍵がどういうものか判りかねた。だが、ある方法によつて、この鍵の正体を知ることが出来た」

そして、正体が判つたのなら、と赤い服の男は言った。「今度は、“魔法”なる力が、どれほどのものか、知りたくなつたのだ」

「それで、我輩に……」ナポレオンの言葉に、男は頷きつつ続けた。

「何の変哲も無い人間に魔法を与えると、一体どうなるか、という実験だつた。具体的には、コルシカの地主の息子で終わるはずだつた少年に魔法を与えることで、どう人生が変わるか、それが見たかつたのだ。ネルソンも然り。牧師の六男、きつと普通の人生を歩むはずだつた少年に魔法を与えることで、どう人生が変わるか、それを見たかつたのだ」

不思議なもので、ナポレオンは、自らを実験体にされたという淡い怒りよりも、自分の野望を端から端まで潰した男が、牧師の子供だつたことの驚きの方が大きかつた。赤い服の男は続けた。

「結果は、上々だつた。フランス・コルシカ島の少年は、遂には皇帝にまで登りつめた。そして、イギリスの牧師の息子もまた、海軍の提督として活躍した。……やはり、この鍵には、人間の運命を変える力があつたのだ。」

だがね、やはり、最後の瞬間には、やはり人間は諦めてしまふよ
うだ」

「どういうことだ？」ナポレオンが訊くと、赤い服の男は続けた。

「この魔法は諦めが一番の敵だ。自分の生を諦めてしまつと、願いは叶わない。だつてこの魔法は、『思いが実現する魔法』。強い

思いがなくなれば、発現しないからね。その点において、君達は優秀だった。君もネルソンも、自分の人生を、簡単には諦めなかった。・・・君も、何度も挫折や鬱屈にぶつかったことだろうか？だが、君は諦めなかった」

ナポレオンは自分の人生をふと振り返った。エジプト遠征での失敗の後でも、エルバ島での屈辱の日々でも。確かに、あの頃の我輩は、自分の生を、諦めていなかった。「我輩は、なんとしても上に登ってやる」という強い思いがあった。だが・・・今は・・・。ナポレオンは、己の今の姿に、なんとない弱さを感じた。

赤い服の男は続けた。

「しかし、人間とは脆いものだ。やはり、最後の瞬間には、自分の生を投げ出してしまふのだ。ネルソンも、そうだった」

「ネルソンも？」ナポレオンが訊くと、男は頷いて続けた。

「ああ。ネルソンが、トラファルガー海戦で戦死したことは話したと思う。ネルソンはな、あの戦いで、自らの体に鉛玉がめり込んだ瞬間に、諦めてしまったのだ。自分の生を」

「それはそうだろう」ナポレオンはネルソンを援護した。「普通、狙撃されてもなお、自分の人生を諦めない人間など、いようはずも無いだろう？」

赤い服の男は、西日に心なしか顔を紅く染めながら、言った。

「だが、助かったのだ。魔法の加護があれば。『生き延びてやるんだ』という強い思いがあれば。だが、彼はそこまで自分の人生に執着が無かった。だから、鉛玉如きで、死んだ」

「その理屈で言えば」ナポレオンは自嘲を込めながら、言った。「我輩もまた、諦めてしまった、ということか。我輩は、脱出どころか外出さえ難しい、このセント＝ヘレナ島で、なお野望を持ち続けなければならなかったのか？」

赤い服の男は、残酷にも頷いた。そして、言った。

「そう。このような、絶望的な状況でも、君は諦めてはならなかった。止まってはならなかった。君は、最後の最後で、運命を変え

られなかったのだ」

「我輩は」ナポレオンは、力なく訊いた。「運命を変えられなかったのか？そもそも、我輩の運命とは何なのだ？」

赤い服の男は、かつてと変わらない、美しい声で、きっぱりと言った。

「運命とは、無限にあるもの。君の選択によって、いくらでも運命は変わる。君の人生はいつからか、『コルシカの地主の息子』という運命から、『皇帝』という運命に変わっていたのだ。

喩えれば、それは道なのだ。君は、たまたま『皇帝』の道歩いたのだ。だが、どの道にも石ころや水溜りがある。それを、君は、あるときは飛び越え、またあるときは迂回して乗り越えたのだ。だが君は、最後の石ころに蹴躓いたのだ。それが、私の言う、『運命に負ける』ということだ」

「我輩は最後の石ころを、飛び越えねばならなかったのか？」ナポレオンは訊いた。

赤い服の男は答えた。「それは、君自身が判断することだ。残念なことだが、自分の運命に負ける、つまり石ころに蹴躓く人間は多い。そしてそのまま、道に行き倒れてしまう人間も多い。だが、君は、それで良かったのか？」

正直なところ、ナポレオンには、このセント＝ヘレナ島での生活は、まるで承服できるものではなかった。一度は皇帝にまで登った男が、こんなところで終わっていいはずは無い。ナポレオンの心中には、そういう想いがあった。だが、ナポレオンは、あまりに老いてしまった。蹴躓いてなお立ち上がるには、ナポレオンの手も足も、そして心も若くなかった。その結果、ナポレオンは、「道で行き倒れ」たまま、朽ちようとしている。

だが。ナポレオンは、心の底に、何か熱いものを感じた。その熱いものを、肚から吐き出した。

「我輩は、ここで終わりたくない」

頬に、熱いものが流れるのを、ナポレオンは感じていた。

「そう。それだ」赤い服の男は、微笑んだ。「その感情、それさえあれば、君は運命に負けない。蹴躓いてもなお、立ち上げられるのだ」

ナポレオンは、ふと西に傾く太陽を眺めた。紅く、昼間と比すればはるかに力を失って見える太陽。ナポレオンは、ふと太陽に訊いてみたくなった。

なあ、墜ち行く太陽よ。お前は、生を諦めていないのか？そして、また東から天に昇ることを、まるで疑わないのか？なあ、太陽よ……。

太陽は、ナポレオンの質問に答える様子も無く、全天の中、孤高に紅く輝いていた。

【20】完結

不意に、思い出したように赤い服の男は口を開いた。

「ああ、そうだ。君に、訊きたい事があるのだが」

紅い太陽をじっと眺めていたナポレオンは、男の方に向き直った。「我輩に聞きたいこと？何だそれは」

赤い服の男は続けた。「魔法をかけた人間に、二つ質問をするようにしているのだ。答えてくれたまえ」

ナポレオンは言った。「立て込んだ質問に答えるのはイヤなのだが」ナポレオンはコホンと咳払いをした。「あなたの頼みだからどんな質問も受けよう」そう言って、ナポレオンは笑った。

すると、赤い服の男は、振り返って言った。「まず、一つ目の質問。君の人生は、楽しかったか？答えてくれ」

ナポレオンは考えた。恥辱にまみれた我が人生。だが、一人の人間の手には余るほどの栄光。そして、英雄、名将としての名声。人一倍地獄も見たが、人一倍の天国も見た気がする。いや、あるいは、人一倍の天国を見たが故に、地獄の淵を深く感じたのかもしれない。

ナポレオンは答えた。「………楽しかった、のだろうな」

そんなナポレオンの言葉に、いささか意外そうな顔をした赤い服の男だったが、すぐにまた口を開いた。

「そうか………では、もう一つ。君の人生は、幸せだったか？」

しあわせ、とナポレオンは口の中で口ごもった。ナポレオンにとって「幸せ」という言葉は、自分の人生にまるで関わりの無い言葉のように思われた。

我輩の人生は。と、ナポレオンは思った。結局、栄光と挫折だけ。その二者のシーソーゲーム。それが我輩の人生だったのでないか、

と。楽しい人生ではあつた。だが、それが「幸せ」と呼べるものだったか、とふと問われれば、その答えに窮してしまう。

結局のところ、「幸せ」というのは、自分でラインを引いて決めるものでしかない。きつと、ナポレオンはその作業を怠ってしまったのだらう。普通の人なら、「妻がいて、子がいて、それで生活できているのだから幸せだ」と、あるラインで納得しようとするのだが、ナポレオンにはそんな感覚は無かつた。というより、数奇な人生を送る間に、そのラインを引く作業を忘れていたのであるう。

そんなナポレオンは、こう答えるしかなかつた。

「……「幸せ」の意味がわからないな、我輩には」
すると、赤い服の男は、さらに意外そうな顔を見せた。

「ん？なんだ？我輩、おかしなことを言ったのか？なぜ、そんな顔を？」

ナポレオンがそう訊くと、赤い服の男は仰々しく答えた。

「いや、君は随分と変わっているな、と思つてね」

何がだ？とナポレオンが訊くと、赤い服の男は続けた。

「普通、この二つの質問をするとね、みんななぜか同じ答えをする。だが君の答えは、その答えとはいささか違う傾向を示したものでね。やはり、それは鍵の力かな？」

「普通は、なんと答えるのだ？」

ナポレオンは訊いた。すると、赤い服の男は指を立て、言った。

「普通、前者の質問には『いいえ』と答え、後者の質問には『はい』と答えるよ」

はは。思わず、ナポレオンは嗤つた。普通の人間は、「人生は、おもしろくはないが、幸せなもの」と考えているということか。我輩とは、全く逆だな。どっちのほうが人生の歩み方として楽しいのかはわからないが、本来歩むはずだつた人生、「幸せな人生」も歩んでみたかつた、と「楽しい人生」を歩んだはずのナポレオンは思ふのだつた。

「さて、と」赤い服の男は、足をゆるゆると動かし始めた。

「行くのか？」そうナポレオンが訊くと、赤い服の男は答えた。

「ああ、もう行く。私は世界を歩む。永遠の時を歩む。そして、私は進む。世界がどうなるうとも、私には知りたいものの答えがどこかで待っている。だから私は行く。その結果、人間世界に、どんな災いを招いたとしても」

赤い服の男の姿が、なぜかおぞましいものに見えた。しかし、その姿はナポレオンの以前の姿に他ならなかった。ナポレオンは己の栄達のため。そして、赤い服の男は「知りたいものの答え」を知りたいがため。だが、その根っこにあるものは、違うようであった。同質のものなのだ。

ナポレオンは思わず思った。可哀想な男だ、と。

「あ、そうだ、忘れてた。魔法を解くのを忘れてた」

ナポレオンの哀れみに気づかず、赤い服の男は、どこまでも明るく声を発した。そして、右手の指を鳴らし、パチンという音を響かせた。

「なにをしたのだ？」ナポレオンがそう訊くと、赤い服の男は答えた。

「ああ、皆を眠らせていた魔法を解除したのだ。だからきつと、そろそろ皆目覚めるだろう」

「ああ」ナポレオンは手をポンと打った。「だが、すごいな、あなたの魔法は」

すると、赤い服の男はキョトン顔を見せ、そして言った。

「いやいや、今の魔法は君の魔力によるものだよ」

「は？」今度はナポレオンがキョトン顔に変わった。すると、赤い服の男はカラカラと笑った。

「いや、人を眠らせるあの魔法はね、君の魔力を流用して行なっていたものだ。私はさる理由で魔法を使えないのだ。だから、君の魔力を無理矢理に使わせていただいていたのだ。ただ、他人の魔力を使うためには、相手の息がかかるほどに近づかないとならないからね」

ああなるほど、とナポレオンは思った。いつぞやのことだったが、赤い服の男は強行突入してきたことがあった。かつてのように人を眠らせる魔法を使えばいいのに、と当時は思ったが、そういうことだったのか。

不意に、赤い服の男は振り返った。そして、言った。

「すまん、ナポレオン」ボナパルト閣下。私は、君の人生を心ならずも弄んでしまった。許してくれ」

謝罪の言葉、結局はそれだった。そんな男を、ナポレオンは笑い飛ばした。

「バカ言つな。そもそも、君は」ナポレオンはキツパリと言った。「後悔してはいけない。なぜなら、君は、歴史上で太陽のように輝く人間だからだ」ナポレオンは、自分に浴びせられた言葉を、赤い服の男に返した。

すると赤い服の男はカラカラと嗤い、言った。

「いやあ、君は聡明だ。その聡明さは、鍵とは関係ないらしい。・・・もしかして、鍵には、人間の隠れた力が発現する、という隠れた力でもあるのかな？」

ナポレオンは、フ、と微笑んで、静かに言った。

「決まっているだろう。我輩は、ナポレオン」ボナパルトである。ナポレオン」ボナパルトは、この頭で戦場を駆け回り、立ち回ったのだよ」

「はは、そうだったな」赤い服の男は、ナポレオンと顔を見合わせる、クスクスと笑った。

その合間、呟くように、赤い服の男は言った。「私もまた、後悔をしてはならないのだな」けれど、その言葉はナポレオンには届かなかった。

そして、赤い服の男は、ナポレオンに手を振ると踵を返し、宵闇が迫るセント」ヘレナ島の海岸に消えた。ナポレオンはそんな赤い服の男の長い銀髪を、ずっとずっと目で追いかけていた。

赤い服の男の来訪から三日後、ナポレオンは死んだ。コルシカの、高台への道を思い浮かべつつ、死んだ。天国に続くような、長く天に続く道を、ナポレオンは夢うつつの中登っていった。

そしてヨーロッパは、彼の死の報を笑顔と安堵のため息で迎えた。皆が皆、ナポレオンの死を喜んでいいるはずなのに、離れて見れば、それはまるで「ナポレオン」という人間を悼んでいるようにさえ、見えた。

さて、この話の結びとして、「ナポレオンのデスマスク」を紹介しよう。

ナポレオンが死んだとき、たまたまセント・ヘレナ島に居合わせたある医師が、「この偉大なる巨大な人間の死に顔を、何としても写しておかねばなるまい、そうでなくばそれは大きな歴史的な損失となる」という使命感のようなものに駆られ、その死の二日後に取られたものだという。まったく奇特な人もあつたものだが、その医師のおかげで、ナポレオンという一個の英雄の死に顔を、現代の我々が観察できるという面も否定できまい。

デスマスクとして収まっているナポレオンの死に顔は、あれだけの人生を歩んだ男とは思えないほど、穏やかな顔をしている。数百万の人間を殺した「悪魔」にも、権力の頂点に登った「皇帝」にも、すべてを失い零落した「咎人」にも似つかわしくない、まるで春の日差しのような、穏やかな顔である。まるで、生きるだけ生き切つて、もはや何も望むものが無い、と言っている老人の顔のようにも、まだまだ登っていききたいのだ、と、うそぶく少年の顔にも見える。

ナポレオンが、その人生の最後の瞬間に何を思ったのか、それは誰にもわからない。

【20】完結（後書き）

ようやく終わりました。感想、批評おまちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5888c/>

皇帝と赤い服の男

2010年10月25日20時53分発行